

日本独文学会
2008年 春季研究発表会

研究発表要旨

2008年6月14日（土）・15日（日）

第1日 午前10時より

第2日 午前10時より

会場 立教大学

目 次

第 1 日 6 月 14 日 (土)

ドイツ語教育部会講演 (13:20~14:20) B 会場 (8 号館 8101) 1

Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEFR)とその理念と限界 吉島 茂 (聖徳大学)

シンポジウム I (14:30~17:30) B 会場 (8 号館 8101) 2

<ドイツ語教育部会企画シンポジウム>

欧州共通参照枠 (CEFR) と日本の複数言語教育

Gemeinsamer Europäischer Referenzrahmen für Sprachen und Fremdsprachenunterricht in Japan

司会：相澤 啓一，吉満 たか子

1. 日本における多言語教育の必要性と CEFR 境 一三
2. 日本の英語教育における CEFR の応用の可能性 福田 浩子
——茨城大学の事例から——
3. 大学でのドイツ語教育と CEFR は相容れない 清野 智昭
4. 『欧州共通参照枠』をどのような文脈に位置づけるか 西山 教行

シンポジウム II (14:30~17:30) C 会場 (8 号館 8201) 6

『群衆と権力』の射程 ——エリアス・カネッティ再読

Tragweite von „Masse und Macht“. Canetti wieder lesen

司会：宍戸 節太郎

- | | |
|--|--------|
| 1. 「変身」の番人カネッティ | 宍戸 節太郎 |
| 2. カネッティの死生学 ——生きる罪と死への抗い | 須藤 温子 |
| 3. 「わたしたちの最も近い似姿はボーリングのピンである。」
——あえてカネッティ没後 14 年のいま『群衆と権力』を読む
意味について | 黒田 晴之 |
| 4. 身体とメディア
——カネッティ『群衆と権力』における「手」の考察について | 古矢 晋一 |
| 5. 境界をめぐって ——カネッティにおける書くこと | 北島 玲子 |
| 6. 「大衆」から「群衆」へ ——カネッティにおける Masse の意味
転換 | 大川 勇 |

シンポジウムⅢ (14:30~17:30) D 会場 (8 号館 8303)11

Satzstruktur と Satzmodus —構造と意味のインターフェースをめぐって

Satzstruktur und Satzmodus —Zum Interface zwischen Struktur und Bedeutung

司会：吉田 光演

- | | |
|--|-------|
| 1. ドイツ語命令文の統語構造の分析—V1 と V2 位置をめぐって— | 吉田 光演 |
| 2. 語順に見る心態詞 <i>ja, wohl, mal</i> の意味分析 | 筒井 友弥 |
| 3. 定動詞繰り上げのトリガー： 文ムードの統語的マーキング | 田中 雅敏 |
| 4. 左周辺部(left periphery)の機能： 談話と文の接点 | 田中 慎 |
| 5. 補文の語順パラメータ | 稲葉 治朗 |
| 6. 統語・意味インターフェースにおけるムードと談話接続 | 森 芳樹 |

口頭発表：語学 1 (14:30~16:10) E 会場 (8 号館 8304)16

司会：小川 暁夫, 山下 仁

1. 「自然現象」的状態変化の言語化について
—言語使用の観点から— カン・ミンギョン
2. 視点と日独語の表現 —翻訳の対照を手がかりに 成田 節
3. *Spielzeug* vs. *Spielzeuge* —Neue Formen des Singulars und Plurals in der deutschen Sprache
Gabriela Schmidt

口頭発表：文学 1（14:30～16:45）F 会場（4 号館 4402） 19

司会：林 志津江，嶋田 由紀

1. <それ自体において完結したもの> ——K.Ph.モーリッツと 武田 利勝
<線の形而上学>
2. グリム兄弟のメルヒェン 手稿から第2版への途 鶴田 涼子
——KHM 9『12人兄弟』を軸として——
3. グリム兄弟における<幼年期ユートピア>のイメージ 村山 功光
4. 13世紀における叙事詩のパロディー化と主人公の描写特徴 渡邊 徳明
—アルトゥスロマン『王冠』のガーヴェイン像を中心に—

口頭発表：文化・社会（14:30～16:45）G 会場（7 号館 7102） 22

司会：吉田 治代，五十嵐 豊

1. 市民を覆う近代都市のネットワークと生の変容 美留町 義雄
—ベルリン小説の背景—
2. 被害者の視点から見た『ニュルンベルクのマイスタージンガー』 大山 浩太
3. バルト・ドイツ人の文化と疾風怒濤 今村 武
4. 魔女擁護者レルヒアイマーと「悪魔伝説」 —『魔法に関するキリスト教的考察と警告』にみる16世紀の世界観— 溝井 裕一

ポスター発表 (14:30~17:30) H会場 (10号館)25

(ポスター発表は同時進行です)

(X209 教室)

- 携帯電話対応 Web 単語帳 Multi Record の開発・運用・評価

— Wortschatz erarbeiten, mitnehmen, teilen

藁谷 郁美, 太田 達也, Marco Raindl,
増子 宗雄 (研究協力者), 中西 令 (研究協力者)

(X309 教室)

- 「ディスコース・マーカ」を言語学的にどうとらえるか 渡辺 学

第2日 6月15日(日)

シンポジウムⅣ (10:00～13:00) C会場 (8号館 8201) 27

災厄の想起と言語化 — イルゼ・アイヒンガーと戦後文学のカノン

Ilse Aichinger und die kanonisierte ‚Nachkriegsliteratur‘. Verhängnisse, Erinnerung, Sprache

司会：浜崎 桂子

1. 想起の規範的な力に抗して 初見 基
——戦後文学のなかのイルゼ・アイヒンガー
Wider die normative Kraft der Erinnerung. Ilse Aichinger in der
Nachkriegsliteratur
2. 静かな抵抗文学の軌跡 ——イルゼ・アイヒンガーとトーマ 眞道 杉
ス・ベルンハルトの比較を中心に
Auf den Spuren der stillen Widerstandsliteratur. Ilse Aichinger im
Vergleich mit Thomas Bernhard
3. 「海」と「砂漠」——アイヒンガーとバッハマンにおける非 山本 浩司
＝場所
„Meer“ und „Wüste“. *Ortlosigkeit* bei Aichinger und Bachmann
4. *Meine Sprache und ich*. Ilse Aichingers Zwiesprache im Vergleich Christine Ivanović
mit Derridas *Le monolinguisme de l'autre*

シンポジウムⅤ (10:00～13:00) D会場 (8号館 8303) 31

大規模コーパスを用いたドイツ語研究 ——ドイツ語教育への応用を目指して
——

Korpus-basierte Erforschung der deutschen Sprache

司会：在間 進

- | | |
|-------------------------------|--------|
| 1. 大規模コーパスを用いると何が見えるか | 時田 伊津子 |
| 2. 語彙使用頻度調査は今どこまで可能になっているか | 山田 善久 |
| 3. コロケーション頻度調査は今どこまで可能になっているか | 今道 晴彦 |
| 4. Web コーパスを用いて何がさらにできるか | 阿部 一哉 |

口頭発表：ドイツ語教育（10:00～12:15）B会場（8号館 8101）35

司会：宮谷 尚実，松岡 幸司

- | | |
|--|---------------------------|
| 1. Multilingualismus —Plurilingualismus | Stefan Trummer |
| 2. Überlegungen zur Integrationsmöglichkeit des projektorientierten Lernens in den japanischen Deutschunterricht | Junko Horiguchi |
| 3. 自律的能力の育成をめざしたプロセス重視のドイツ語教員養成・研修モデル | 太田 達也 |
| 4. 日本人とネイティブによるチームティーチングと Moodle を利用した e-Learning 学習の組み合わせによる初級ドイツ語授業の試み | 里村 和秋
Oliver Bayerlein |

口頭発表：語学 2（10:00～12:15）E会場（8号館 8304）38

司会：荻野 藏平，嶋崎 啓

- | | |
|--|-------|
| 1. ゴート語 <i>tēkan</i> „berühren“ とトカラ語 B <i>tek-, tāk-</i> „berühren“ の関連性について —トカラ語の側からの再検証と新たな見解— | 安永 昌史 |
| 2. ルクセンブルク語の接続法
——間接話法と要求話法を中心にして—— | 田村 建一 |
| 3. 話法助動詞 <i>müssen</i> の意味の変遷と認識的意味の成立 | 宮下 博幸 |
| 4. 19 世紀における <新聞の言語> 批判をめぐる „Sprachbewusstsein“ | 細川 裕史 |

口頭発表：文学2（10:00～12:50）F会場（8号館8202） 41

司会：村山 功光，荒又 雄介

1. 壁の白とページの白 —ウィーン分離派の建築と出版物— 浅井 麻帆
2. 詩人の想像力と歴史哲学 ——ディルタイにおける力の概念 森田 團
3. ドイツ啓蒙における「人間性」と「美的なもの」 藤井 俊之
—レッシングからアドルノへの道筋—
4. F. キットラーと情報通信技術 -人間×^{マン}機械^{マシン}進化論の観点から- 豊倉 尚
5. „Zur Kritik der Gewalt“ als eine Kriegserinnerung Naoki Mukai

口頭発表：文学3（10:00～12:15）G会場（7号館7102） 45

司会：美留町 義雄，井口 三奈子

1. ムージルのアフォーリズム集構想とロマンとの関係 桂 元嗣
2. 偶発性の詩学 バッハマンの『偶発・発作のための場所』に 徳永 恭子
ついて
3. 文学はごみである 木本 伸
——ベルにおけるフモールの概念をめぐって——
4. Uwe Johnson „Jahrestage“ における両想起構造の結節点 江面 快晴

ポスター発表（10:00～13:00）H会場（10号館） 48

（ポスター発表は同時進行です）

（X207 教室）

- 音声コミュニケーション中心の少人数授業と学習者のドイツ語運用能力
星井 牧子，生駒 美喜，石塚 泉美，朝倉 久絵（研究協力者）

(X208 教室)

- ドイツにおける青少年保護政策とメディアリテラシ教育の現状 濱野 英巳

(X209 教室)

- 唱歌とドイツ文化受容 高木 良平

第1日 6月14日(土)

ドイツ語教育部会講演 (13:20~14:20) B会場 (8号館 8101)

Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR)とその理念と限界 吉島 茂 (聖徳大学)

CEFRは様々な側面から考察できる。この本の翻訳者ということで、何回か講演を依頼された。その依頼者側の関心も従って一通りではない。多くはこの本の言語能力のレベル表およびその「例示的能力記述文」に注目が集まっているが、この本を外国語教育の基準として考えようとする立場もある。一方で、この本が非常に政治的な背景を持って成立したことは忘れられているとの印象も受けた。もう一つ特筆すべきは、このCEFRと並行して考えられているEuropean Language Portfolioの存在である。それをまったく無視するか、あるいはこちらにだけ目を向けている場合さえある。これらの点をかいつまんで話しながら、この数年のCEFRとの付き合いの中から現在考えていることも述べたい。

まず政治的背景:46カ国からなるCouncil of Europeのメンバー国が言語教育政策の一貫としてこのCEFRに準じた具体的言語教育を揃って施行することである。CEFRはまずそうした政策実行のための参照枠なのである。その背景にはもちろんEUに顕著に見られる、人と物資の移動が大きく働いている。その結果がPlurilingualismとPluriculturalismの指導理念である。

外国語能力の相互比較:そうした教育政策が目指すのは、COE参加国の住民の外国語能力の相互の比較であり、そのための物差しを作る時の基準としてCEFRが機能することである。ただそうした具体的な物差しを作るには個別言語別にさまざまな作業が必要になってくる。そうしてできた物差しを使ってさらに個別言語の検定試験用のテスト内容が決められることになる。

またそれと並行して各国の個別言語の教育のための指導要領が作られ、それに基づいたシラバスが作られ、具体的な教育が行われることになる。

こうした言語教育を支えるのがEuropean Language Portfolioで、これはCEFRに基づいて各教育責任機関が作ることになっている。その具体的な形は、特に児童向けのものは実にさまざまで、それ自体が比較文化的考察の対象としても興味深い。

こうしたことを見ながらこのごろ湧き上がってくるのは、外国語教育とはそもそも何なのか、EUのような Multi-culture も Multilingualism も見られない上、他国との交流もまだまだヨーロッパの比ではない日本で、外国語をそれも小学校段階に取り入れることの意義は何であろうかという疑問である。それに答えるためにも CEFR の根底にある教育観、言語観、言語教育観を見て行きたい。

シンポジウム (14:30~17:30) B 会場 (8 号館 8101)

<ドイツ語教育部会企画シンポジウム>

欧州共通参照枠 (CEFR) と日本の複数言語教育

Gemeinsamer Europäischer Referenzrahmen für Sprachen und Fremdsprachenunterricht in Japan

司会：相澤 啓一，吉満 たか子

Gemeinsamer Europäischer Referenzrahmen für Sprachen: lernen, lehren, beurteilen (= Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment. 以下 CEFR) の英語版が 2001 年に欧州評議会の言語政策部局によって発表されて以来、次々に各言語版が出版された (2004 年には CEFR が日本語に翻訳された)。以後、欧州評議会に加盟するすべての国が学校教育・成人教育における外国語科目のカリキュラムを CEFR に準じて改訂することが義務づけられた。また CEFR の理念を実現するための道具としての Europäisches Portfolio der Sprachen の開発が各国・地域で進められている。

外国語としてのドイツ語教育を担当する政府系機関である Goethe-Institut でも、ドイツ語コースのレベル表記に CEFR の定める基準を用いるようになり、すべてのレベルにおいて検定試験を設けるべく、A1、A2 レベル用に「スタート・ドイツ語 1」および「スタート・ドイツ語 2」を開発、実施するようになった。さらに従来からの ZD (B1 レベル) の他に、2007 年から B2 レベルの試験も実施されている。そのため、ともすると CEFR は「外国語能力を判断するためのツール」として捉えられがちであるが、CEFR が作成された背景には、欧州連合の基本原則である多文化・多言語主義が存在する。多文化・多言語主義における言語教育は、単に言語を運用する能力を身に付けることのみを指すのではなく、それぞれが異文化を理解し、異

文化に対応する能力を身に付けることによって、平和共存のヨーロッパを造りあげることをも内包している。そのために欧州評議会は個々人が母語以外に複数の言語を学び、それらを場面によって切り替えながら使用することを意味する「複言語主義」という概念を打ち出している。またそれに対応して、すべての生徒が母語以外に2つの言語を学習するという「1+2 言語主義」を掲げている。

グローバル化が進む一方、日本の外国語教育の現状は欧州の「複言語主義」とは程遠く、大学においてはドイツ語をはじめとするいわゆる第2外国語の授業時間数は今なお削減される傾向にあり、高等学校における第2外国語の導入も広がりを見せているとは言い難い。また、CEFRを日本のドイツ語教育に応用しようとする場合、それは様々な問題をはらんでおり、教師の間では賛否両論があるものの、これまで十分な議論がされて来たとは言えない。

本シンポジウムでは、CEFRの理念と実践、その長所と問題点を幅広く議論し、日本における外国語教育を今後どのように発展させるべきか、またドイツ語教育がこうした動きにどのように対応すべきなのかを、英語教育およびフランス語教育からも発表者を招き考える。

《お知らせ》

シンポジウムに先立ち、同会場において吉島茂氏（聖徳大学）による講演「Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment (CEFR)とその理念と限界」が開催されます。この講演はシンポジウムとの連動企画です。シンポジウムでの議論を深めるためにも、併せてご参加いただければ幸いです。

1. 日本における多言語教育の必要性と CEFR

境 一三

世界的な労働市場の流動化によって、日本でも古くからの東アジア系住民だけでなく、新たにブラジルなどの南米系住民の割合が高まっている。今日日本の言語教育で重要なのは、彼らの日本語教育だけでなく、彼ら独自のアイデンティティーを確立するための継承語教育と、多数派である日本語母語話者が彼ら少数派の言語や文化に対する関心を高め、相互を尊重する心と態度を養う教育であろう。

そこでは、外国語として英語のみを提供するような教育、さらに言うならば単なる言語的能力の開発だけを目的とした教育では不十分であり、異文化や異言語に対

する「気づき」を養い、言語学習者の心を「他者」に対して「開く」実践を行う多言語教育が必要となる。

以上の点を考慮すると、言語教育政策の問題は大きい。外国語教育、特に英語教育は中学校から大学・大学院に至るまで行われ、現在では小学校段階への導入が進んでいる。しかしながら、国家レベルの言語教育政策が不在であるために現場には共通の理念がなく、また各段階間で学習の移行が円滑に行われるような情報共有と協調作業が行われているとも言い難い。日本においても国家レベルと各教育機関レベルの言語教育政策とそれを基にした教育の実践が必要不可欠である。

長年にわたるヨーロッパの言語教育政策の議論とその成果である CEFR は、私たちがこれから多言語教育を構築する際に、多くの示唆を与えてくれることは間違いないだろう。

2. 日本の英語教育における CEFR の応用の可能性 —茨城大学の事例から— 福田 浩子

小学校の外国語活動の必修化が決まり、新学習指導要領も発表されて、中学校の外国語との接続や言語教育としての一貫性をどうするかという議論が盛んに行われている。それに伴い、日本でも英語教育の共通の枠組や尺度が必要であるという認識が高まってきている。本発表では、茨城大学の英語教育改革を事例として紹介しながら、日本の英語教育における CEFR の応用の可能性について述べたい。

茨城大学では、平成 13 年 7 月に教養英語教育の質の向上を目指した茨城大学教養英語教育改革プロジェクトが発足した。改革は、まず教養英語教育の現状調査で問題点を明らかにした後、新たな教養英語プログラムを企画立案するという手順で進められ、平成 14 年度には理念や目標を見直し、透明性が高く、しかも国際的な基準でもある CEFR を参考にして総合英語プログラムを構築していくことを決めた。更に平成 16 年度には CEFR に依拠した茨城大学総合英語レファレンス・レベルを策定、17 年度の全学導入に当たっては、レベル・コーディネータが各レベルの到達目標を掲げたシラバスを作成して授業を実施し、レベル内で共通の評価を行った。その後、レファレンス・レベルの見直しを経て Can-do checklist 等を作成し、18 年度から使用している。このような経験から、克服すべき様々な問題点はあるが、CEFR の日本における応用は可能であり、その意義もあると考える。

3. 大学でのドイツ語教育と CEFR は相容れない

清野 智昭

現在の大学のドイツ語教育、とくに、大多数を占める教養課程においては、欧州共通参照枠（CEFR）はなじまないものであり、拙速に導入すれば、益よりも害の方が大きくなると思われる。

CEFR の基本理念は、平和共存のヨーロッパを多文化・多言語主義にもとづいた言語教育によって実現することである。すなわち、隣人たちとの紛争を解決、もしくは、未然に防止するための言語教育だといってよいだろう。このモデルは現在の日本では東アジアや南米系の住民の言語の教育に当てはまりこそすれ、大学教育のドイツ語の理念（もしあればだが）とは方向性が異なる。我々がドイツ語を学習する意義は色々あろうが、その中で、ドイツ語によって蓄えられている膨大な知的財産へのアクセスを可能にし、それを享受したうえで、自らを振り返り、日本とドイツ語圏の建設的な対話に寄与することが大きいと考える。つまり、現に存在する関係や問題を解決するための言語教育ではなく、言語教育を通しての関係づくりである。その実際の有りようは、それぞれの大学が持つ社会的責任、所属する学生の知的水準、興味のあるように応じて変わる。CEFR を単に「使用」するのではなく、それを「勉強」した上で「我々は学生にドイツ語を使って何ができるようになってもらいたいのか」を冷静かつ真剣に考えることが重要である。

4. 『欧州共通参照枠』をどのような文脈に位置づけるか

西山 教行

『欧州共通参照枠』に認められるヨーロッパ言語教育政策の成果を、社会政治的文脈の全く異なる日本社会に移入することは可能だろうか、また移入に意義があるのだろうか。「共通参照レベル」は評価の透明性と指標の明確さの点で、日本在住の言語教師の注目を引き、フランス語教育においてもそれは例外ではない。しかし多くは、評価項目をどのように教育現場に統合するのかといった教授法上の関心にとどまり、『欧州共通参照枠』そのものに対する明らかな誤解も少なくない。

しかし『欧州共通参照枠』を「共通参照レベル」という評価基準表に還元することが複言語主義を推進する装置としての『欧州共通参照枠』の使命だろうか。『欧州共通参照枠』を戦後ヨーロッパの 50 年にわたる言語教育政策の文脈に位置づける場合、この新たな概念装置はそれ以上の意義があるのではないか。

日本の大学教育は複数の言語教育を提供するという点で、多言語教育へ向けた編

成を古くから整備してきたが、1991年の大綱化以降、外国語教育は縮小の危機にさらされている。『欧州共通参照枠』の主張する言語教育政策や複言語教育を参照し、そこに改革の可能性を探ることによって、危機的事態に直面している多言語教育を活性化し、多様性に基づく言語教育を見直すことはできないだろうか。

本発表では、フランス語教育内部での『欧州共通参照枠』の受容を検証するにとどまらず、マクロとミクロの視座それぞれから具体的提言を交えて考察を深めたい。

シンポジウムⅡ (14:30~17:30) C会場 (8号館 8201)

『群衆と権力』の射程 — エリアス・カネッティ再読

Tragweite von „Masse und Macht“. Canetti wieder lesen

司会：宍戸 節太郎

1994年にカネッティが没して、13年余りの時間が過ぎた。カネッティの遺稿は本人の希望に従い、チューリヒ中央図書館が管理しており、2024年以降に公開される手紙や日記の類を除いて、すでに閲覧可能となっている。生前の書簡やインタビューからは、未発表の小説や戯曲、『群衆と権力』続編の出版も期待されたが、この期待が満たされる気配はどうやら今後もない。

1981年のノーベル文学賞受賞はカネッティの名前を世界的に認知させたが、だからと言ってそれはすぐには彼の思想と文学への理解に結びつかなかった。受賞から10年後の1991年、たとえばJ・パールは学位請求論文の冒頭にこう述べている。「エリアス・カネッティの小説『眩暈』について学術論文を書くことは、一つの勇気ある試みを意味する。(…)作品の普遍的承認は今日にいたるまで、なんら自明のものではない」。しかしながら、『眩暈』を始め彼の著作全般に対し「勇気ある試み」は続けられた。90年代を通じてとりわけ学位請求論文の出版が相次ぎ、カネッティを取り巻く環境が変化していく。これはカネッティ受容が同時代のそれから、次世代による検討に移行したことをも意味している。

カネッティが長くその名声とは不釣り合いな受容に甘んじなければならなかった背景には、彼自身が意図して安易な受容を拒んだという側面も無視できない。たとえばカネッティは「群衆と権力」の研究に際して、企ての一切を新たに始めるため、あらゆる思想的連関の中に自らが置かれるのを拒否した。どんな説明も独自の述語

を用いて行い、性急な抽象化や概念定義を避け、さらに自分の「群衆と権力」の体系が閉じることをしないよう、周到に配慮をしている。

本シンポジウムは、主著『群衆と権力』を討論の基軸としつつ、カネッティの思想と文学が指し示すさまざまな可能性を見極めようとする、日本で最初のカネッティ・シンポジウムとなる。これまで大々的に取り上げられる機会がなかったとはいえ、マクルーハン、ベルンハルト、イエリネク始め、20世紀来の知的状況にカネッティが与えたインパクトは大きい。シンポジウムでは各発表者がそれぞれに、「変身」、「死」、「距離」、「身体」、「境界」、「群衆」と、カネッティ思想の主だった主題を取り上げ、全体としてカネッティの生と思想を重層的に浮かび上がらせることを目標とする。

現在のドイツ語圏、英語圏の研究状況を見回してみても、良きにつけ悪きにつけカネッティをカネッティでもって解釈する、「カネッティによるカネッティ」はようやく幕を下ろした。2005年、カネッティ生誕100年に当たるこの年、カネッティ関連書籍はちょっとした出版ラッシュを迎え、伝記やモノグラフィーの出版も相次いだ。幸い日本には、カネッティの翻訳の大部分を手掛けた岩田行一氏らによる、良質の邦訳も揃う。カネッティの思想と文学について本格的議論を始めるのに、機は十分に熟している。

1. 「変身」の番人カネッティ

宋戸 節太郎

人間は変身の力を借り、自らの環境の中で自己を主張する力、やがて巨大な権力を手に入れた。自己を主張する力と権力とは、人間につねに独立した個人であることを求め、他方人間はその意に反して、同じ変身の能力ゆえに個を踏み越え、群衆ともなる。「変身」の思想は間違いなく、「群衆と権力」をめぐるカネッティ思想の中心に位置するにもかかわらず、過去における研究の蓄積は非常に少ない。

カネッティは「変身」の語で、基本的に古代ギリシア以来「ミメシス」と称されてきた人間の模倣能力、およびそのプロセス周辺を言い当てようとしている。プラトンのミメシス同様カネッティの変身も両価的に議論が進められるものの、カネッティの狙いはプラトンのそれとは正反対の方向を指示する。長い議論の歴史があるとはいえ、結局プラトンがミメシスの予測し難い力を恐れたのとは対照的に、カネッティの狙いは合理性に回収されることのない、いかなる目的や意図からも完全に自由な、変身における良質の部分を最大限救出することにある。

この「変身」の思想は現在の我々人間の思考や行動に、はたしてどんな可能性を提示するというのだろうか。カネッティによれば、人間には過去のおびただしい変身の遺産があり、神話や民話、伝承、記録、文学の形で、我々はそれを知ることができるという。本報告では、カネッティ唯一の長編小説『眩暈』と、『群衆と権力』から「変身」の記述に充てられた一章を中心に提起し、具体的な検討を試みる。

2. カネッティの死生学 — 生きる罪と死への抗い

須藤 温子

エリアス・カネッティは終生死に抗った思想家であった。彼は、『群衆と権力』において権力の究極の形態を生殺与奪権ととらえ、権力の根源にある死を絶対悪として断罪し続けた。特に、カネッティは戦場で生き残る状況を例にあげ、そこに権力が発生する事態をみてとっている。「生き残る瞬間とは、すなわち権力の瞬間である」のだ。つまり『群衆と権力』では、「生き残る者」は自分だけが今もなお生を継続しているという「根源的な勝利」の感覚や優越感を抱く者として、一様に権力者と同一視されている。

ところが、『群衆と権力』と同時期に書き進められた膨大な量の『断想』に目を向けると、このようなカネッティの死生観の理解には大幅な修正が求められる。『断想』では、「生き残ることの優越感」が一転して「生きながらえることの罪悪感」とされるからである。こうした罪悪感は、1970年代後半から刊行されたカネッティの自伝三部作にも大きく影を落としている。彼の自伝は他者の死——とりわけ父と母の死——に覆われ、そこでは自己の生が他者の死によってしか規定されない。そこで本発表は、『群衆と権力』に『断想』と自伝三部作を対置させることで、生きのびた側に身をおき続けたカネッティの死生学の全体像を明らかにする。

3. 「わたしたちの最も近い似姿はボーリングのピンである。」

— あえてカネッティ生誕100年のいま『群衆と権力』を再読する

黒田 晴之

2005年の生誕100年はカネッティ研究のターニング・ポイントとなった。なぜなら Sven Hanuschek などによる実証研究が、カネッティという作家の背景を明らかにしただけでなく、死後の文集“Party im Blitz”や一部公開された遺稿が、カネッティ像を部分的に修正することにもなったからだ。かれが『群衆と権力』で描いた

個人と個人のあいだの「距離」は、カネッティがまずもって体現していたのである。たとえばブレヒトやデリダなど同時代の作家や思想家への辛辣な評価、アイリス・マードックへのサディスティックな人物評、自伝のなかで神聖化さえされたヴェツァとの醒めた生活に、影を落としている決定的で絶対的な「距離」がそれである。

かかる研究環境の進展のなかで『群衆と権力』をいまいちど検討したい。あらためて『群衆と権力』を現段階で検討するに当たって、本発表はこの論考を従来のように内在的に論じるのではなく、カネッティの Œuvre (とくに『マラケシュの声』、カフカ論、自伝、断想)のなかでの位置付けを試み、

- 当初予告された『群衆と権力』の続編が完成しなかったこと
- かれの文学が断想や自伝といったジャンルに移行したこと
- 『群衆と権力』で抉剔された「生きのこること」の観念の推移について考察する。

さらに本発表では後期作品のなかに散見される「誇り」「無力」という観念についても検討したい。わたしたちはすでにカネッティ生誕 100 年を経た今現在、この作家についてはたしてなにがどこまで分かったのか、そろそろ自問しなければならない時期に来ているのである。

4. 身体とメディア — カネッティ『群衆と権力』における「手」の考察について 古矢 晋一

カネッティの『群衆と権力』は 1960 年に上梓され、62 年に英訳されているが、64 年に出版されたカナダのメディア理論家マクルーハンの『メディアの理解——人間の拡張』において既にまとまった形でその議論が受容されている。マクルーハンはメディア技術、人工物さらには人間の活動全般を身体や感覚器官の拡張ないしその切断として理解したが、その際に『群衆と権力』における身体、とりわけ「手」についての考察を重要な参照源としていることは意外と指摘されることが少ない。

『群衆と権力』では人間の身体や身ぶりについての考察が重要な位置を占めている。とりわけ、何かを掴む、掌握する「手」は権力のシンボルと見なされる一方、「手」はその精妙かつ多彩な動きゆえに人間の身体の中でも最も変化、「変身」に富む器官であるとされる。さらにカネッティは、手をはじめとする身体部位が、道具や武器の発明においてモデル的な役割を果たしたことを考察している。

本発表では、マクルーハンが『群衆と権力』における身体をめぐる議論をどのよ

うにメディア概念と関連付けているかを検証し、さらにメディア技術論的な視点から『群衆と権力』の「射程」を測ることが課題となる。

5. 境界をめぐる — カネッティにおける書くこと

北島 玲子

『群衆と権力』は、「人間は何より未知のものとの接触を恐れる」という一文で始まる。人間は接触恐怖から逃れるために、いたるところに境界を設ける。しかし、未知のものとの接触を恐れる人間は他方で、他者と自己の境界を無効にすることでその恐怖から逃れようとする。それが果たされるのが群衆においてである。そこでは社会や文化が設けたさまざまな境界は破棄される。

自己と他者の境界をめぐるせめぎ合いは、権力の問題においても確認できる。権力は他者との間につねに境界を設定しつつ、他方で他者を自己に取り込もうとする。外部に向けて引かれる境界は、内側に向けては統合のシステムとして作用するのである。作家であるカネッティにとって、「権力」の問題は「言語」の問題でもある。言語それ自体が、あるいは書くことそのものが世界に境界を設けつつ、未知のものを既知のものに取り込むという権力性を帯びている。「権力の病」であるパラノイアの特徴のひとつとして、言語による世界掌握の願望が挙げられている。書くことのもつ権力性をいかに回避するか、これはカネッティにとって切実なテーマであった。

本発表では、『群衆と権力』というテキストそのものが「群衆」として構成されていること、それが書くことのもつ権力性の回避の試みであることを検証し、カネッティにおける書くことと権力性の問題を、境界をめぐる自己と他者の関係から考察する。

6. 「大衆」から「群衆」へ — カネッティにおける *Masse* の意味転換

大川 勇

ポーやボードレールを捉えた量的概念としての「群衆」は、オルテガにおいて質的概念としての「大衆」に転化する。『大衆の反逆』でオルテガは、劇場や海水浴場に押しかける群衆のイメージから出発しつつ、科学者や医者といった知的専門家を「大衆」と規定した。このような質的概念としての「大衆」を、ニーチェもまたオルテガに先立って見いだしている。ニーチェの「教養俗物」は、ドイツの教養市

民層全体を「賤民」として罵倒する言葉であった。しかしながら、ニーチェやオルテガのように「大衆」を罵倒するだけで、大衆社会状況のもたらす諸問題は解決するだろうか。ニーチェから「探求者」の概念を継承したホーフマンスタールの保守革命論が、ナチズムを「大衆の反逆」の完成形態と見なすラウシュニングに受け継がれ、反ナチの言説として流布しながらも、しかし思想としての有効性をもちえなかった歴史的経緯をふりかえるとき、罵倒とは異なる仕方で「大衆」を捉え直す視座の必要性が痛感される。

ラーテナウ暗殺にたいする抗議デモの体験から *Masse* に解放の契機を見たカネッティは、質的概念としての「大衆」をふたたび量的概念としての「群衆」に転換し、大衆罵倒とは異なる位相で *Masse* を捉えようとする。ナチズムの大衆動乱をくぐり抜けたユダヤ人のひとりであったカネッティがなぜそのような視座を獲得できたのか——その手がかりを『群衆と権力』のなかに探ってみたい。

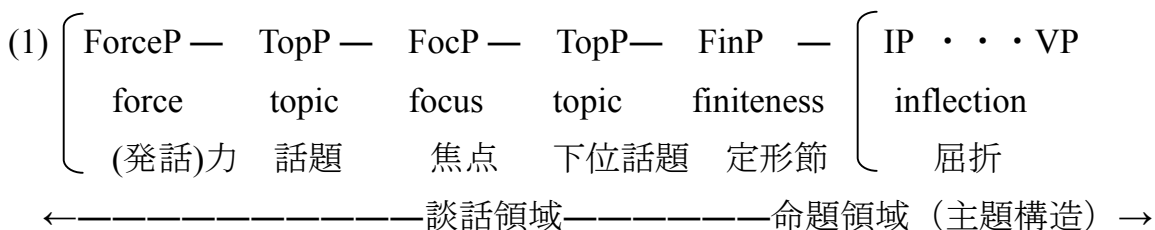
シンポジウムⅢ (14:30~17:30) D会場 (8号館 8303)

Satzstruktur と Satzmodus —構造と意味のインターフェースをめぐって

Satzstruktur und Satzmodus —Zum Interface zwischen Struktur und Bedeutung

司会：吉田 光演

理論言語学における研究が進んだ今日、従来は曖昧で扱い難いものとされた *Modalität*, *Topik*, *Fokus*, *Satzmodus*, *Illokution* などの意味論的・語用論的概念が、形式的かつ機能的な観点から、精密に分析されるようになった。命題の上位に位置するこれらの意味論的要素を統語構造との関係で分析する動きもさかんになっている。たとえば、生成文法の立場から Rizzi (1997) は、*The Fine Structure of The Left Periphery* において、節構造(CP: complementizer phrase)の左端周辺部を談話領域と結びつける接点と仮定し、次のような豊かな統語構造を提案した。



(1)の是非はともかく、構造と機能の問題を対立的に見るのではなく、同じ舞台上

議論できる生産的土壌が漸く醸成されてきたといえる。それは、個別言語を超えた一般言語学的な意味で、形式言語学(Formallinguistik)と機能言語学(Funktionale Linguistik)の論点がかみ合ってきたという意義をもつだろう。

他方、ドイツ語を対象とする個別言語学的立場から見れば、豊かな形態・統語形式・機能を備えたドイツ語を研究する営みの中から、言語普遍・言語対照的な貢献を積極的になしうる状況が整った（復活した？）ことを意味する。古くは Topologische Felder の観点から論じられ、最近では生成統語論や最適性理論・構文文法などの観点から論じられている、動詞第2位(V2)、前域、中域、従属節（副文）の SOV 語順—といったドイツ語統語論の問題と、ドイツ語圏の言語理論・言語哲学が得意とする豊かな意味記述アプローチ（Satzmodus, Modalität, 時制論理, 命題論理, 心念詞の意味分析など）とが、ゲルマニスティックの枠組みを超えた一般言語学的な文脈でもアクチュアルな問題として再び新しい知見をもたらすものとして注目されている。

本シンポジウムは、こうした問題意識を背景に、文モード・モダリティと節構造を切り口として、ドイツ語の文・命題のウチとソトをいくつかの角度から論じることを狙いとする。生成統語論、形式意味論、機能言語学の観点から迫ることとするが、予定調和的に結論を出すのではなく、対象とするドイツ語の言語現象の新たな問題設定の定位を明らかにしたい。

1. ドイツ語命令文の統語構造の分析 — V1 と V2 位置をめぐって—

吉田 光演

ドイツ語の命令文の研究は統語論では活発でなく、主に語用論レベルで命令文の発話機能と要求の関係が論じられてきた。それは、①命令形の単純な形態、②動詞第1位、③主語の不在—といった記述で済むと考えられたからだ。生成文法で議論されたのは、ドイツ語の命令文が動詞句投射, I' (屈折句中間投射), C'(節中間投射)のような中途半端な構造を持つか否かであった(Brandt et al. (1989))。しかし、文左端が法と対応するように形式と意味の接点を仮定すると、動詞を上位に置く命令文は、卓越した Satzmodus を示すものであり、主語を超えた動詞第1位(V1)は動詞移動の証拠となる(=(1))。また、命令文でも例外的に、話題が文頭に来て動詞第2位(V2)になる場合がある(=(2))。

(1) a. ??Du öffne die Tür! b. Öffne du die Tür!

(2) *Das sag lieber nicht!* (V2)

本発表では、先行研究と異なりドイツ語の命令文は Rizzi (1997)の構造に似た豊かな構造を持ち、随意的に話題句を投射すると主張する。談話領域への節のリンクを示すために Satzmodus を表す S-MoodP を設定し(Rizzi の ForceP), ここに命令素性 [IMP(ERATIVE)]がある時、命令形の動詞はこの素性と一致する位置に移動し、話題要素は機能投射 TopP の指定部に移動すると考える。

(3) [_{S-MoodP} [IMP] [_{TopP} das₁ sag₂ [_{FinP} t'₂ [_{IP} (du) [_{VP} lieber nicht t₁ t₂]]]]] !

2. 語順に見る心態詞 *ja, wohl, mal* の意味分析

筒井 友弥

心態詞の結合可能性とその語順は、文タイプ(Satzmodus)や発話行為タイプ(Illokutionstyp),あるいは同音異義語(Homonym)の基底位置により制限される(cf. Thurmair 1989, 1991; Abraham 2000)。特に、その語順に注目することは、心態詞の意味論的な考察において重要な課題である。

本発表では、*ja wohl* の分析を出発点として、意味最小限主義の立場から、心態詞 *mal* の結合について統語構造との関係で分析する。この際、その同音異義語が時間副詞である点に基づき、基底構造で *mal* は temporal と modal の素性を併せもつと仮定した上で、心態詞としての用法では、意味解釈レベルで TP (時制句) の付加位置(命題のソト)に移動して素性の認可を受けるとする。(1)は、このことが表層語順からうかがえる例である。

(1) a. Kannst du morgen VP mal[temporal] zu mir kommen?

b. Kannst du TP mal[modal] morgen zu mir kommen?

また、(1)のように潜在的に「要求」を表す文では、*mal* は発話を「要求」に一義化する。このことは、*mal* が意味的に„Modifikator des Sprechaktoperators (Zimmermann 2004)“であることを示唆している。これらの点をふまえ、心態詞 *ja, denn, wohl* との結合および時間副詞と共起した(2)のような発話の分析を通して、*mal* の統語的・意味的・語用論的な振舞いを考察する。

(2) Kannst du wohl mal morgen das neue Bild bringen?

3. 定動詞繰り上げのトリガー：文ムードの統語的マーキング

田中 雅敏

定動詞の統語的位置をめぐる(1a-b)の対比は、主文と副文における定動詞位置の非対称性を統語的に記述してはいるものの(den Besten 1983, Taraldsen 1986, Tomaselli 1990 など)、定動詞が補文標識の生起位置と同じ位置をターゲットにして移動しているということを述べるだけでは、定動詞が移動することの効果について記述したことにならない。

(1) a. Hans [C hat] Maria geküsst. b. ..., [C dass] Hans Maria geküsst hat.

実際、一定の条件下では埋め込み節でも定動詞移動が認められ(=2)), 補文標識の有無に関わらず定動詞移動が駆動されることがわかる。

(2) Es muss geregnet haben, weil es ist auf der Straße nass. ('weil + V2')

本発表では、Rizzi (1997)を手がかりに、文脈(主文の動詞など)への埋め込みを表示する文法的結合子(補文標識[+objektiv])の上位に、談話に対する話者の主体的態度([+subjektiv])を表示する談話的結合子(文ムード標識)のレイヤーを仮定し、主要部移動は[+subjektiv]な談話的結合子の存在によって駆動され、文ムード素性を可視的にすると主張する。

(3) a. (主文...), [S-MoodP1 weil^{-subj(-subjektiv)} [IP es ... ist]] (V後置)

b. [S-MoodP2 +dekl, +subj [S-MoodP1 weil^{+subj} [FinP es [Fin0 ist] [IP ...]]]] (=2)

4. 左周辺部(left periphery)の機能：談話と文の接点

田中 慎

テキストの一部である文を記述する際に、「部分としての文がどのようにテキスト全体」に繋がっているのかということが中心的な課題となる。特に、テキストを左から右へ展開する線状プロセスと考えた場合、文の先頭部にあたる文左周辺部(left periphery)は、その接続部として非常に重要な働きを持っていると考えられる。

文左周辺部の機能について、Rizzi (1997)は統語的な見地から以下のような観察を行っている：“C[omplementizer system] expresses a distinction related to tense but more rudimentary than tense and other inflectional specifications on the verbal system: finiteness“ (284). この Complementizer- System としてまとめられる左周辺部には、本シンポジウムの他の発表で触れられるとおり、大きく言って Satzmodus や Verbmodus を表示するとされる部分とトピック、焦点を表示するとされる部分とが

多少入り組んだ形で存在している。本発表では、これらの左周辺部の統語的特徴について機能的な見地から見直してみたい。その際、機能的な統一的特徴として作業仮説的に以下のことを提案したい：「文の左周辺部は、(コアとなる) 命題を(談話) 状況と結びつける働きを持つ」。この仮説から、文と談話としての左周辺部の現象は、「文周辺部の機能」と一般化されるべきであることを主張し、一般的な文におけるレイヤー構造について考察をしてみたい。

5. 補文の語順パラメータ

稲葉 治朗

本シンポジウムのテーマの一つである「命題のウチ」を代表するものとして、主文の中に埋め込まれた補文がある。本発表では、ドイツ語及びその他の諸言語を例に、補文内部の統語構造及び語順について考察する。英語のような VO 言語(1)では、補文は動詞の右側、補文マーカはその補文の文頭に生じるが (cf. Dryer 1992), いわゆる OV 言語(2-4)では様々なケースが観察される。いずれにせよ補文構造は、(5)で表した 2 タイプのいずれかに分類することが出来る：

- (1) She believes [that the rumor is true].
- (2) weil ich glaube [dass er gerne Bier trinkt]
- (3) ぼくは [[牡蠣は広島がうまい] と] 思う。
- (4) a. chele-Ta Sune-che [je [or baba aS-be]]
 boy-CF hear-Pst3 [Comp [his father come Fut3]]
 b. chele-Ta [[or baba aS-be] bole] Sune-che
 boy-CF [[his father come Fut3] Comp] hear-Pst3
 =‘The boy has heard that his father will come.’ (ベンガル語)
- (5) a. V [Comp S] b. [S Comp] V (Comp=補文マーカ, S=補文)

本発表では、一見して語順が対称的になっただけのように見える(5)の 2 つの表示は実は構造的に異なるということを、言語類型的観点もふまえた上で論じる。さらにそれがどのような要因に因るのか、補文や補文マーカの生起位置とどのように関わってくるのか、などといった問題についても考察を行いたい。

6. 統語・意味インターフェースにおけるムードと談話接続

森 芳樹

発話行為論の伝統の中で文型 Satztypen の分析を進めていた時代から、

Altmann(1987)の一般化とでも呼ぶべき「謎」が、ドイツ言語学には存在している。

「Verb-Letzt-Satz に断定文は存在しない。」独立の動詞後置文は命令、詠嘆、願望などの他の Satzmodi に逃げていってしまうし、従属文としては断定・主張には届かないのである。しかし「断定・主張」とは何なのか、「届かない」とはどういうことなのか。前者はモダリティ、ムードの関連性と区別を考えることにより、後者は等位・従属 (Reis(1997)の Integriertheit もここに含める) の関連性と区別を考えることにより答を導くことができる。

Truckenbrodt(2006)は、文タイプと発話行為タイプの関係を意味論によって関係づけられることを論じ、ドイツ語の V2 現象がこの関係づけによって一般的に把握できることを示した。本発表では、文ムードと動詞ムードという名で文型と形態的パラダイム(「法」)が問題にされる時には、①意味論的に見て発話状況におけるモダリティと②(発話状況発で)描写事象にアプローチするモダリティが密接に絡み合っていることを主張する。②の中に発話状況の方に依存する認識的モダリティと描写事象に依存する根源的(あるいは広義の義務的)モダリティがある。この3つが3種のコンテクスト (Context of Utterance (CU), Context of Thought (CT), Context of Sentience (CS)) に対応するはずである。

口頭発表：語学 1 (14:30～16:10) E 会場 (8 号館 8304)

司会：小川 暁夫, 山下 仁

1. 「自然現象」的状态変化の言語化について—言語使用の観点から—

カン・ミンギョン

現実界を概念化する能力および概念化の様式は普遍的であると考えられる。しかし、概念化した事柄(そして新たに概念化される事柄)をどのように語彙化するか、どのような言語形式で表すかは、各個別言語ごとに異なる。本発表では、このような問題意識のもとで、ドイツ語の「自然現象」的状态変化の言語化について—いわゆる使役交替動詞を中心に—調査・分析した結果を示す。

第一のポイントは、絶対自動詞、絶対他動詞との対立という観点から、使役交替

動詞を特徴づけることである。その際、絶対自動詞と使役交替動詞の対立と、絶対他動詞と使役交替動詞の対立には、異なる意味基準が働いていることを述べる。

第二のポイントは、使役交替動詞が意味特性の相違によって他再動詞と他自動詞に必ずしも明確に区別しえるものではないということである。従来の分析は、主として「形が違えば意味が違う」という原理に基づいて行われてきたが、実際の言語使用は、必ずしもその原理によって統御されているとは言えない。

第三のポイントは、サンプル例に基づき抽出した「自然現象」的状态変化の認識パターンが具体的にどのような語彙・表現形式によってどのように言語化されているのかを、コーパスの事例に基づき示すことである。それにより、実際に使用される表現形式の柔軟性を実証的に示す。

なお、この調査・分析は、「動詞結合価辞典」に代わる「動詞使用頻度辞典」の作成のための基礎研究である。

2. 視点と日独語の表現 — 翻訳の対照を手がかりに

成田 節

言語研究において**視点** (Perspektive) という概念はさまざまな意味で用いられているが、日独語の構文の特徴を対比的に明らかにする上で、とりわけ**視座** (どの立場から事態を見るか) と**注視点** (どこに目を向けて事態を見るか) の区別が有用である。たとえば、ドイツ語の (他動詞の) 受動文が動作主ではなく被動作者に目を向けてある行為を見るのに対して、日本語の受身文は被影響者 (典型的には話者自身) の立場から行為を見る、というように基本的な意味の違いを捉えることができる。このような事態把握の傾向の違いを、話者の位置とも関連づけて敷衍すると次のようになる。ドイツ語では表現主体である話者が事態を外側から見るので、一般に話者自身も表現対象となる (Ich sehe ein Flugzeug)。また、表現主体が外側に位置する、すなわち視座が中立的である分、注視点の選択が関与的になる (能動文と受動文)。一方、日本語は表現主体である話者が事態を内側から見るため、話者自身は表現対象とはなりにくい (飛行機が見エル)。また、事態を内側から捉えるため、中立的な視座は取りにくく、基本的には話者 (あるいは話者に近い者) の立場から事態を把握し、それが表現に現れる傾向が強い (Sie ... brachte mich nach Hause. 彼女ハ... 家マデ送ッテクレタ)。本発表では、小説などの翻訳に見られる日独語の表現パターンの異なりを、このような (日英語対照研究などで既に数多く指摘されている) 事態把握の仕方の相違という枠組みで説明することを試みる。

3 . *Spielzeug* vs. *Spielzeuge* - Neue Formen des Singulars und Plurals in der deutschen Sprache

Gabriela Schmidt

Das Wort „Spielzeug“ kann singularisch „Lass den Apparat, das ist kein Spielzeug!“ und pluralisch-kollektiv „Der Junge hat viel Spielzeug“ verwendet werden. Auf der ARD-Homepage finden sich jüngst Belege mit dem Plural „Spielzeuge“. Diese Form lässt sich durch Textbeleg-Recherchen in die 80iger Jahre zurückverfolgen, ein sprunghafter Anstieg ist seit Ende der 90iger Jahre zu verzeichnen. Daran schließen sich folgende Fragen an: „In welchem Zusammenhang tritt die Neubildung des Plurals „Spielzeuge“ auf?“ „Welche Funktion hat sie dabei“? Gibt es noch andere derartige Neubildungen, vielleicht auch in umgekehrter Richtung, d. h. eine neugebildete Singularform? Wie sind derartige grammatisch - lexikalische Neubildungen linguistisch einzuordnen?“ Diese zunächst spontan gebildeten Formen, die eigentlich nicht „der Regel“ entsprechen, die sich aber im Laufe der Zeit durch ihren Gebrauch etablieren, sollen hier diskutiert werden. In der Fachliteratur werden solche Neubildungen teilweise sehr kritisch beurteilt. Es herrscht keine Einigkeit, ob es sich dabei um Neologismen handelt. Die Interpretation der Textbelege wird dann der Frage nachgehen, ob es sich in diesen Fällen um die Verletzung oder die Auslegung einer sprachlichen Regel, um ein sprachliches Bedürfnis oder um sprachliche Kreativität handelt. Dieses Thema ist aus linguistischer und didaktischer Perspektive wichtig, denn es behandelt die Frage der Grammatikalität und Akzeptabilität von sprachlichen Neuerungen.

司会：林 志津江，嶋田 由紀

1. 〈それ自体において完結したもの〉—K. Ph. モーリッツと〈線の形而上学〉—
武田 利勝

「それ自体において完結したもの *das in sich selbst Vollendete*」。この優れて古典主義的な概念を，モーリッツの美学理論に立脚しながら展望し，この自明のようであるが自明でない理念に，ある一面からできる限り明確な形態を与えることが，本研究発表の課題である。

芸術作品の〈美しい線〉をめぐる十八世紀美学の一つの潮流は，モーリッツにおいて，「自立的な」芸術作品を構成する「輪郭」と，それを取り巻く「枠」という概念のうちに受け継がれる。モーリッツはこれらの概念を，芸術理論の教師に奉ずる者として正統的に論じる一方で，本来は造形芸術のための同概念を，文学の分野にまで適用することを試みた。ゲーテの『ヴェルテル』に「輪郭」と「枠」を浮かび上がらせ，それを絵画的に再構成する試みを通じて，モーリッツは，自立的であるべき芸術作品を取り巻く「枠」が次第に明確な「輪郭」を失っていくのを認める。

確かに，「輪郭」や「枠」の概念に着目することによって，モーリッツが展開した諸議論は，古典主義的な〈線の美学〉の系譜上に置かれる。しかし，彼自身による「美的曲線」概念を詳細に観察してみると，却ってそこから逸脱しようという志向が強く際立ってくる。つまり，曲線の美的価値ではなく，その〈形而上学的〉な意味に迫ろうという，きわめてロマン主義的な志向である。そしてこのような志向に着目した場合，モーリッツにおける「それ自体において完結したもの」という概念を，初期ロマン主義，特にシュレーゲル兄弟による詩学／芸術学の萌芽と見なすことも可能となる。

2. グリム兄弟のメルヒェン 手稿から第 2 版への途 —KHM 9『12 人兄弟』を軸として—
鶴田 涼子

『子どもと家庭のためのメルヒェン集』*Kinder- und Hausmärchen* (初版 1812 年、

以下 KHM と略記する) は、グリム兄弟によって蒐集・編集された民間伝承集である。KHM は、手稿であるエーレンベルク稿以降、7 回の書き換えが行われている。中でも、手稿から初版、そして、ヴィルヘルム・グリムに編集が委ねられた第 2 版 (1819 年) での加筆や変更が著しい。KHM の手稿から第 2 版への改編の途上には、登場人物の反応や行動描写の詳細化、会話の増加、登場人物の内面を窺わせる表現の加筆などが見られる。具体例の一つに、登場人物が涙を流して泣く場面の追加が挙げられる。

スイスの文芸学者マックス・リュートイは、『ヨーロッパの昔話』*Das Europäische Volksmärchen* (1947 年) の中で、メルヒェンの登場人物は、身体性や内面の世界などを欠くことを指摘し、たとえメルヒェンの登場人物が泣くとしても、それはその行為が筋の展開に必要なためであるとする。しかしその一方、KHM において登場人物が泣く場面は、登場人物の感情表出として描かれているものと考えられる。本発表では、KHM 9 『12 人兄弟』の手稿から第 2 版での改編を手がかりとして、グリム兄弟による加筆や削除によって作品全体がどのような変化を遂げたか、その軌跡を辿る。登場人物の言動、とりわけ涙を流して泣く場面の追加がメルヒェンの内容に与えた影響を検討する中で、登場人物が感情表出を始めたことの意味を探る。

3. グリム兄弟における〈幼年期ユートピア〉のイメージ 村山 功光

グリム兄弟は、当初は学問的関心から『グリム童話集』を蒐集したが、第 2 版において学問色を取り除き〈子どもの本〉にする方向へと転換した、と一般に考えられている。しかし兄弟のメルヒェンをめぐる言説には、当初から〈子ども〉のイメージが付きまとっている。彼らは啓蒙期以降の児童文学が前提とする子ども観や教育観とは異なる〈幼年期ユートピア〉を抱いていた。これは子どもの現状にではなく、自然と人為の二元論に基づく観念的な歴史哲学的構想である。それによると、子どもは古代人や素朴な民衆に似て、人為的害悪を受けていない純粹で〈本来的な〉人間とみなされている。

ブレンターノが推奨した Ph. O. ルンゲによる 2 つのメルヒェン、およびブレンターノの〈民謡〉編集法が『童話集』にとって重要だったことは指摘されてきた。しかし、この二人は兄弟の〈幼年期ユートピア〉観にも影響を及ぼしたと推測される。すなわちルンゲやブレンターノが描く図像は、子どもを〈自然〉の世界とつながる象徴的存在として描く点で、兄弟によって人類史的・個人史的に捉えられた子

ども観と親縁性が強い。兄弟は『童話集』を通じて彼らなりの〈幼年期ユートピア〉の〈風景〉を描いたといえる。

こうしてみると、『童話集』第2版に付された語り手の〈農婦〉の肖像は重要な意味を持つ。つまり、メールヒェンは民族の歴史の伝承者との結びつきが強くなり、普遍的〈幼年期ユートピア〉を離れて、民族精神の表出である *Volksmärchen* としてカノン形成が行われることになる。

4. 13世紀における叙事詩のパロディー化と主人公の描写特徴

—アルトゥスロマーン『王冠』のガーヴェイン像を中心に— 渡邊 徳明

アルトゥスロマーン『王冠』 (*Diu Crône*) には『エーレク』、『イーヴェイン』、『パルチヴァール』など前時代の古典的な宮廷騎士叙事詩の名作の影響が認められ、それらを連想させるエピソードが多く採り込まれている。このことは、『王冠』が書かれた1230年ごろには上記の名作群についての知識が広く伝わり、厚みのある受容者層を形成していたことの証左ともいえる。この『王冠』では騎士ガーヴェインが主人公であり、彼は多くの冒険を経た後に聖杯探索の旅に出、そして聖杯の秘密を知るに到る。言うまでも無く、この聖杯探索のエピソードはヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』が強く意識されている部分であり、『王冠』では何度も、パルチヴァールが犯した聖杯城での失敗について言及される。その失敗とは、パルチヴァールが傷に苦しむ聖杯王アンフォルタスに対しいたわりの問いかけを怠ったというものであるが、『王冠』の主人公ガーヴェインはパルチヴァールと異なり聖杯を前にして、適切な問いを立てることに成功する。そもそもこの二つの作品においては、すでにそれまでの場面で他者に対し問いかけを行うこと自体についての是非がしばしば問われているのであり、それが顕在化し主人公の人生に決定的な結果をもたらすのが、聖杯を前にしたそれぞれの問いかけの場面なのである。本発表では、この問いかけの問題を軸に、『王冠』が『パルチヴァール』をどのように受容しているのかを論じてゆきたい。

口頭発表：文化・社会（14:30～16:45）G会場（7号館7102）

司会：吉田 治代，五十嵐 豊

1. 市民を覆う近代都市のネットワークと生の変容 —ベルリン小説の背景—

美留町 義雄

本発表では、十九世紀後半から二十世紀初頭のベルリンに焦点が当てられ、この時代にドイツ帝国の首都として生まれ変わった都市再開発の様相が論究される。城壁の撤去、市内鉄道の敷設、旧市街の解体など、文字通り都市の形を変えたその改造計画については、従来の研究で頻りに論じられてきた。しかし、ベルリンの都市研究がさらに進んだ近年、上下水道やガスなどの敷設状況、新聞・雑誌などのメディア環境、路線バスや市電などの交通事情など、市民の日常を取り巻く各ネットワークの成立と展開が、諸資料の発掘と同時に明らかにされ、都市の近代化の問題が、一般市民の実生活の領域においても考察できるようになった。このような背景のもと、本発表では、ベルリン再開発の本質を、都市を覆いつくした衛生・情報・交通ネットワークの展開に求め、市民がこの新たな都市機能の網目に取り込まれていく過程が論じられる。その際、都市論や技術史などの資料を下地としながら、この時期のベルリンを舞台とした文学作品、いわゆる「ベルリン小説」が主な対象として分析される。特に、M. クレッツァーの『ティンペ親方』やA.デーブリー『容赦なし』を取り上げるほか、W. ベンヤミンの回想録や森鷗外の衛生論なども援用する予定である。これらの文献をもとに、近代化が進む都市の中で変転する、人間の生のあり方やその行方に迫りたい。

2. 被害者の視点から見た『ニュルンベルクのマイスタージンガー』

大山 浩太

ヴァーグナーの『ニュルンベルクのマイスタージンガー』において、メルカーであるベックメッサーをユダヤ人のカリカチュアと見なす解釈は、ヴァーグナー自身が論文等の形で表明した反ユダヤ主義的言説とも相まってすでに定説となっている。これまでの研究がこの作品を反ユダヤ主義批判の立場から問題視する際に着目してきたのは、ベックメッサーの描かれ方であった。例えばナチスの登場前である1910年にはすでに Richard Rote が、また戦後には Walter Jens らが、それぞれベッ

クメッサーの救済を主張している。

しかしこの作品には、単なる反ユダヤ性にとどまらない弱者差別・排他的構造の問題が残っているように思われる。その意味で、上記のようなベックメッサー救済の主張だけでは、彼を「笑いもの」にし排除しようとした当事者に対する批判的考察が行われているとは言えない。そして、この民衆のヒーローであるザックスの言動が示している問題性については、これまであまり考察がなされてきてはいないのである。

本発表ではもっぱら肯定的な主人公として受容され続けてきているザックスの言動を批判的に検証し、ザックスのベックメッサーに対する「いじめの構造」を立証する。ザックスのみならず彼を取り巻く民衆、そして作品の観客が長年にわたって「ベックメッサーいじめ」に「快感」を感じてきたとするなら、本研究は被害者の声に耳を傾け、作品そのものに内在する弱者抑圧・排他的な構造を取り出すことにより、被害者の苦痛を顧慮せずこの作品を「祝賀オペラ」として鑑賞する受容態度がはらむ問題性を指摘したい。

3. バルト・ドイツ人の文化と疾風怒濤

今村 武

2004年5月EUに加盟したバルト三国と総称されるエストニア、ラトヴィア、リトアニアの地域には、11世紀以来ドイツ人の東方植民が始まった。この地域で発展したバルト・ドイツ人の文化と社会を本発表は考察の対象とする。特に18世紀後半ハーマン、ヘルダー、レンツというバルト海沿岸地域出身あるいは滞在経験のある思想家・詩人における、後年シュトゥルム・ウント・ドラングと呼ばれる新たな文学観・美学観の萌芽に着目したい。この地域が疾風怒濤の揺籃の地であることを再確認し、1766年ドルパトで作られたレンツの戯曲『傷ついた花婿』を題材に、背景となるバルト・ドイツ人の文化と社会構造の一端を明らかにしたい。

バルト海沿岸地域におけるドイツ語文学は1990年代より研究対象として本格的に取り上げられ始めた。しかしヘルダーやレンツは同地域を離れて初めて文学的・思想的な開花を迎えるためか、後進地域として見られたバルト三国地域のドイツ文化研究は従来手薄な分野であった。この比較的新しい研究分野の成果を援用しつつ、これまで社会的文化的背景には着目されなかった『傷ついた花婿』を説明したい。バルト地域に居住するドイツ人は、「ドイツ人」としてのアイデンティティーを保持しつつ、同地域の支配者ロシア皇帝に仕え重用されていた。バルト・ドイツ人の

社会には多様な階層が生じており、各階層間の緊張関係は時には大きな事件にまで発展した。さらに同地域の奴隷売買、拷問、土着民との関係等の社会問題に考察を加えたい。

4. 魔女擁護者レルヒアイマーと「悪魔伝説」－『魔法に関するキリスト教的考察と警告』にみる 16 世紀の世界観－溝井 裕一

本発表では、レルヒアイマー・フォン・シュタインフェルデン（本名ヘルマン・ヴィテキント）の著作『魔法に関するキリスト教的考察と警告』（1585）において、いかなる文脈で「悪魔伝説」や「魔法使い伝説」が語られていたのかを検証する。

この著作は、魔女裁判に異議を唱えた先駆的書物として歴史にその名をとどめる。しかしそこには数々の「悪魔伝説」および「魔法使い伝説」が登場するため、伝説研究の立場からも注目されてきた（「伝説」とは「本当にあったこと」として語られる伝承のことである）。たとえば本書に登場する逸話は、グリム兄弟やグレッセの伝説集に抜粋・掲載されている。

しかしなぜ、レルヒアイマーは多くの伝説を語ったのか。彼は著作において「魔女」の無力さを説き、火刑に処すべきでないとした。だがその一方で悪魔の存在を否定せず、魔女裁判の隆盛のかげに悪魔の暗躍をみてとろうとした。そのなかで、悪魔やファウストなどの「魔法使い」にまつわる「本当にあった話」がとりあげられ、論考に用いられたのである。

当然、レルヒアイマーの掲載した話の多くは、史実に由来するとはいいがたい。しかしこのような話が真剣に語られえた背景には、当時まで継承されていた悪魔観や、「本当にあった話」からモラル的意味をひきだそうとする当時の歴史認識などがあった。

そこで本発表では、上の問題を視野に入れながら、レルヒアイマーが「悪魔伝説」や「魔法使い伝説」を語った理由と、その根底にあった 16 世紀の世界観について考察したい。

ポスター発表 (14:30~17:30) H会場 (10号館)

(ポスター発表は同時進行です)

(X209 教室)

- 携帯電話対応 Web 単語帳 **Multi Record** の開発・運用・評価

— **Wortschatz erarbeiten, mitnehmen, teilen**

藁谷 郁美、太田 達也、**Marco Raindl**

増子 宗雄 (研究協力者、株式会社図研)

中西 令 (研究協力者、**DHL** ジャパン株式会社)

語彙の学習は、学習者がただ与えられた単語の知識を受動的に記憶していくのではなく、学習者個人がすでに持っている知識体系を基盤に、自らの興味に応じて知識を構築していくプロセスと捉えられる。したがって、学習者ひとりひとりが興味のあるトピックごとに単語帳を作っていくことのできる環境を利便性の高いインターネット上で提供できれば、学習者を主体とした自律的学習環境の構築につながるだろう。また、言語学習において「ともに学ぶ仲間」の存在が学習動機を大いに促進することから、コミュニティーを形成する機能を付与すれば、言語学習環境の構築に貢献すると考えられる。加えて、ほとんどの学習者が日常的に使用しているメディアである携帯電話でも利用可能とすれば、利便性はさらに高まるであろう。

以上のような仮説に基づき、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)ドイツ語教材開発研究プロジェクトでは、携帯電話対応の自己構築型 Web 複言語単語帳 **Multi Record** を開発した。主な特徴は次の通りである。1) トピックごとに自分の単語帳を構築できる。2) 携帯電話でも利用可能。3) 他の学習者の単語帳が閲覧可能。4) 特定の単語帳をグループ化できる「コミュニティー機能」。5) 四択クイズなどの練習機能。6) パソコン上で入力できるすべての言語に対応。

本発表では、学習者に対して行ったアンケート調査の結果についても報告し、**Multi Record** が自律学習環境の構築に与える影響を示す。

Der Postervortrag stellt den webgestützten Wortschatztrainer *Multi Record* vor, bei dessen Entwicklung der Prozess der Wissenkonstruktion beim Wortschatzlernen sowie die Bedeutung des sozialen Lernens berücksichtigt wurden. Die Anwendung, die auch vom Handy aus zugänglich ist, erlaubt es, eigene, themenbezogene Wörterbücher anzulegen, Wörterbücher anderer Nutzer einzusehen, Wörterbücher einer Lernergruppe zur Verfügung zu stellen und Wortschatz spielerisch zu trainieren. Ergebnisse einer Nutzerbefragung

werden referiert.

(X309 教室)

- 「ディスコース・マーカ―」を言語学的にどうとらえるか 渡辺 学

Schiffrin (1987), Fraser (1999), 最近では Jucker, Günthner などの問題提起と分析をきっかけとして、„ich meine“, „weißt du“, „ihr wisst schon“, „ey Mann“, „(ich) so...“, „Also -...“, „aber hallo“など、体系言語学の枠組みでは長い間研究対象としてはどちらかと言えば周縁部に位置づけられてきた「ディスコース・マーカ―(談話標識)」は、ディスコース分析、コミュニケーション文体論をはじめとして、今日の言語学において一定の注目を集めている。ところで、これらの言語単位のすくなくとも一部分は、少し見方を変えてたとえば慣用句研究の視座からは「語用論的(に用いられる)イディオム」としてとらえることもできるし、「言語的ステレオタイプ」(Roth 2005 など)とも見なせる。

もしも今日の言語学に「閉塞状況」があるとする、それは部門の高度の細分化によって、言語現象の分析の究極の目標への意識が希薄となり、その背後にある言語観・言語論、言語理論へのフィードバック、あるいは言語観・言語論、言語理論による分析データの基礎づけが不足していること、下位部門相互間の協働が欠乏していることにも一因があるのではないか。

この発表では、「ディスコース・マーカ―」に焦点を当てて現代ドイツ語の複数のテキスト種類、メディアジャンルから具体的な言語資料を挙げ、その振舞いをディスコース分析以外の切り口も視野に収めつつ観察分析・記述・解釈しながら、いくつかの言語研究の分野・方法の相互乗り入れの可能性を探る端緒とする。

第2日 6月15日(日)

シンポジウムⅣ (10:00~13:00) C会場 (8号館 8201)

災厄の想起と言語化 ——イルゼ・アイヒンガーと戦後文学のカノン

Ilse Aichinger und die kanonisierte ‚Nachkriegsliteratur‘. Verhängnisse, Erinnerung, Sprache

司会：浜崎 桂子

イルゼ・アイヒンガーが、作品の質から見て、戦後ドイツ文学の最も重要な作家の一人であることは言うを俟たない。しかし名が知られているわりに、実際に読まれることが少ないのも否定しがたい事実である。ナチ統治下のウィーンで半ユダヤ人として過ごした経験を基に書かれた処女長編小説『より大きな希望』(1948)は、ユダヤ人迫害を逸早く取り上げた画期的な作品だが、まさにこの厄介な主題と難渋な独特の文体ゆえに一般には受け入れられなかった。52年の「47年グループ」賞受賞作『鏡の話』によって、「カフカ風の」「不条理な」小説家として戦後文壇の一隅に場を占めるようになるが、他方でこのイメージが強すぎて、作家の実像への接近が妨げられている側面もある。そして彼女自身も、唯一の長編小説を発表した後は、まるで無名性への遁走を図るかのようになり、ラジオドラマや掌編、さらには断章へと、沈黙すれすれの「小さな形式」に向かい、内容上も伝記的事実との連関をできるかぎり拭き去っていった。このため、上記二作品の他に代表作というべきものを挙げるのが難しく、正典としての文学史記述にすんなりとは収まらないところがある。

1987年以降は作品を発表することもなくなり、既に過去の人との感もなくはなかった。しかし今世紀になって日刊紙に掌編を連載しはじめ、その集成(『映画と災厄 (Film und Verhängnis)』『定かならざる旅(Un glaubliche Reisen)』『サブテキスト(Subtexte)』)が注目を浴びるようになった。そこでは、アクチュアルなテーマを取り上げつつ、一族を初めとするユダヤ人の災厄の記憶に取り組んでいる。その上で、映画と旅をモデルとした想起の作業そのものにも詩的な考察を加えているのだ。これらの仕事は、近年の「メモワール文学」の流行のなかに置くと、物語による体系化を徹底的に拒絶する点で、孤高の輝きを発しており、災厄の想起という問

題に新しい光を投げかけるものである、と言ってよいだろう。

こうした最近の作品に触発されつつ、アイヒンガーの仕事の全体を見直すとともに、敬して遠ざけられてきたこのアウトサイダーのフィルターを通して戦後文学のカノンを再点検し、ひいてはその限界について考察を加えること、これが本シンポジウムの主たる目的である。そして世界的に進行中のアイヒンガー再評価（07年5月の仏ルーアン大コロキウム、Text+Kritik 特集号など）に寄与することを目指す。日本語とドイツ語を併用して行なわれる個別報告（各25分）は、1）想起と物語／歴史、2）社会批判、3）ユートピア的地誌、4）言語と他者性という主題群を、それぞれ「戦後文学」の代表的な作家たち（グラス、ベルンハルト、バッハマン、ツェランら）と対比しつつ取り上げる。報告終了後の討論（60分）は主としてドイツ語で行なう予定である。

1. 想起の規範的な力に抗して—戦後文学のなかのイルゼ・アイヒンガー

Wider die normative Kraft der Erinnerung. Ilse Aichinger in der Nachkriegsliteratur 初見 基

〈戦後ドイツ文学〉は、社会的規範性と不可分なかたちで存立してきた。それは、現実の歴史への強い指示のうえに作品が成立している、という次元にとどまらない。形式面にあっても〈通約可能性〉に立脚しており、20世紀前半の文学で試みられた形式破壊、言語実験などは概してなりをひそめた。さらにまた、戦後文学にとって中心課題とも言える、〈死者〉〈過去の災厄〉に向けられた〈想起〉という行為は、必然的に規範的な要請と結びつかざるをえない。つまり戦後社会のなかで徐々に合意を克ち取ることになる、〈負の過去〉を直視するべきであるという倫理的な要請に、文学という運動もが積極的に関与していった。

このような枠組みから考えてみたとき、イルゼ・アイヒンガーの戦後文学における位置は独特であることが明快になる。アイヒンガーの作品が伝統的な小説形式に依拠していない、という点だけではない。それよりもアイヒンガーの想起のまなざしが、他の戦後文学者におけるのと同様に〈負の過去〉に向けられる場合にも、そこに形成されかねない〈想起の共同体〉に回収されまいとする力がことさら強く働いているのが特徴的だ。

本報告では、アイヒンガーを戦後文学という参照枠のなかに位置づけつつ、その作品に観察できる、規範的な力を逃れようとする想起のあり方を指摘することを主

旨として、〈ひとつの物語〉にまとまる心地よさを拒否したその内容及び形式の特性を分析する。

2. 静かな抵抗文学の軌跡 ——イルゼ・アイヒンガーとトーマス・ベルンハルトの比較を中心に

Auf den Spuren der stillen Widerstandsliteratur. Ilse Aichinger im Vergleich mit Thomas Bernhard
真道 杉

本発表では初期から最近発表された作品を概観する中で、アイヒンガーの社会批判が文学表現の上でどのような変遷を辿ってきたのか、時代ごとに例をあげて考察する。

初期の作品、『不信声明』（1945）及び『絞首台の上の演説』（1949）では、悲惨な戦争体験を直にテキストにぶつる文体が特徴的である。50年代に発表された、短編集『縛られた男』の中では、ホロコーストを原点とした「死」のテーマが、寓話的なモチーフの中で形を変えて展開され、70年代の作風は、『狼と7匹の子ヤギ』に見られるように、ホロコーストを想起させるモチーフを用いながらも、物語を解体する中に静かな批判を内包させる手法へと転換している。80年代の『クライスト・モース・ファサーネ』は、時期を同じくして発表され、大きな反響を呼んだベルンハルトの戯曲『英雄広場』（1988）と同様、オーストリアの戦後処理問題を鋭く照射した作品であり、両作品とも、場所を記憶へ結びつける手法を用いているが、ベルンハルトが、1938年のオーストリア併合の際に表舞台となった英雄広場を扱ったのに対し、アイヒンガーは個人の記憶の場を記号化し静かな表現方法を用い、非常に対照的である。2004年になって、改めて単行本出版された『狼と7匹の子ヤギ』も、極右勢力をにらみホロコースト想起を時代に問うている。

アイヒンガーの作品の社会批判は時代とともに形を変え、一見デクレッシェンドされてゆくように見えるが、静かにしかしはっきり聞き取れるものであり続けている。

3. 「海」と「砂漠」 ——アイヒンガーとバッハマンにおける非=場所 „Meer“ und „Wüste“. Ortlosigkeit bei Aichinger und Bachmann 山本 浩司

アイヒンガーとバッハマンは、ある時期以降冷ややかな間柄になったとされるが、

場所の表象に注目すれば、意外な親和性を示している。ウィーン地誌でいえば、東南の縁に位置する第三区は、アイヒンガーにとって、つかの間の幸福と絶滅の記憶が隣り合わせに結びつく場である。バッハマンも社会という「最大の殺害現場」のなかのアジールとしてここを機能させた。この関を越えた先にある東欧は、ハプスブルク神話や東方ユダヤ人の文化的な記憶に接続された上で、ノマド的生存の可能性を表すと同時に西欧近代の極致としての絶滅収容所を用意した。この二重の意味で「非＝場所」となる。

さらに両者に特徴的なのは、西欧の外部が理想化されるのではなく、近代に否定を突きつけるアナーキーな「砂漠」と「大海」が西欧の中心に呼び込まれていく点である。破局の表現は、「破滅」が「基底」への着地に読みかえられるバッハマンのボヘミア詩に見られるように、否定性の極致で再生に反転する可能性をはらむ。ただし、日常的連続性が破られるのは、「短絡／フラッシュ」や「Lichtung」といった特徴的なイメージに見られるように、一瞬のことにすぎない。このような断片性や未完性という創作原理は、アウシュヴィッツ以降という文脈に置けば、単一の結果（「最終的解決」）だけを目指して効率的機能化を推進する近代化、その連続性幻想のなかに間隙を探し出す抵抗の試みと呼べよう。

4. *Meine Sprache und ich. Ilse Aichingers Zwiesprache im Vergleich mit Derridas *Le monolinguisme de l'autre** **Christine Ivanovic**

In seiner vergleichsweise späten Schrift *Le monolinguisme de l'autre* (1996) thematisiert Derrida die Spaltung zwischen dem sprechenden Subjekt und der Sprache, die es spricht, als eine Erfahrung der ‚Veränderung‘. Er verweist damit auf eine historisch bedingte einschneidende Erfahrung seiner Jugend, die für ihn zur Urszene seiner philosophischen Bemühungen wurde. Derrida ist bei weitem nicht der einzige, dessen sprachliche Identität infolge des noch über die Grenzen Europas hinaus wirksamen deutschen Nationalsozialismus maßgeblich ‚verändert‘ wurde. Während man diese Frage anhand der Texte von Elias Canetti, Georges-Arthur Goldschmidt, Jean Améry, Paul Celan u.a. bereits intensiv diskutiert hat, blieb diesbezüglich die Position der österreichischen Autorin Ilse Aichinger, die ihr Land nicht verlassen und die keinen Sprachwechsel vollzogen hat, bisher weitgehend unbeachtet.

Gerade innerhalb Österreichs aber erfährt Aichinger vor, während und nach dem Krieg,

aber auch nach der sogenannten Wende den Fortgang der Geschichte als eine Spaltung, die mit der deutschen Sprache ihr eigenes Bewusstsein betrifft und die die Möglichkeiten und Grenzen ihrer Identitätsbildung markiert.

Bereits Ende der sechziger Jahre reflektiert Aichinger diese Spaltung explizit, indem sie *Zwiesprache* mit ihrer eigenen Sprache hält. In einer zwitterhaften Textform, die zwischen erzählender und essayistischer Prosa, zwischen scheinbar authentischem Sprechen und Rollenrede changiert, inszeniert Aichinger in den beiden Texten *Meine Sprache und ich* und *Die Schwestern Jouet* (1967/68) eine existentielle Grenzsituation, die in mehrfacher Hinsicht mit der von Derrida thematisierten ‚Einsprachigkeit des Anderen‘ vergleichbar erscheint.

シンポジウム V (10:00～13:00) D 会場 (8 号館 8303)

大規模コーパスを用いたドイツ語研究 ——ドイツ語教育への応用を目指して—— **Korpus-basierte Erforschung der deutschen Sprache**

司会：在間 進

ドイツ語研究は、言語の存在意義がコミュニケーション手段として用いられることを考えた場合、「言語使用」も分析対象に入れるべきであり、また学問の存在意義が社会的な貢献を果たすべきであることを考えた場合、研究成果がどのような形で「社会と関わり」を持ちうるのかを明確にすべきである。このような認識に基づき、私たちは、現在、ドイツ語教育への応用を想定し、ドイツ語の使用分析を行っている。

本シンポジウムの目的は、以上のようなドイツ語研究の「理念」を実現するために行っている、大規模電子コーパス（Web コーパスも含む；以降単に大規模コーパスと呼ぶ）を用いたドイツ語研究の、現時点での具体的な研究成果を示すことにある。ドイツ語大規模コーパスとして、現在、利用可能なものは、以下の四つである。

Deutsches Referenzkorpus DeReKo (IDS Mannheim)

Digitales Wörterbuch (Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften)

Deutscher Wortschatz (Universität Leipzig)

Dewac (Center for Mind/Brain Sciences, University of Trento)

本シンポジウムの構成は、以下の通りである。

1. 大規模コーパスを用いると何が見えるか (時田伊津子)
2. 語彙使用頻度調査は今どこまで可能になっているか (山田善久)
3. コロケーション頻度調査は今どこまで可能になっているか (今道晴彦)
4. Web コーパスを用いて何がさらにできるか (阿部一哉)

第一の発表では、大規模コーパスの活用がドイツ語研究に新たな可能性をもたらすことの一例として、大規模コーパスの大量の事例に基づいて、二重目的語構文における情報構造的原理を実証的に示す。言語使用の原理を明らかにするための基礎研究でもある。

第二の発表では、各種の語彙使用頻度リストを紹介した後、語彙(品詞)の使用頻度調査の方法論的確立を目指し、現在試行的に行っている使用頻度調査の結果を報告する。語彙(品詞)の使用実態を明らかにするための基礎研究である。

第三の発表では、コロケーション分析における問題点をまとめつつ、現在、コロケーションがどのような形でどこまで調査できるかについて報告する。語句結合の使用実態を明らかにするための基礎研究である。

第四の発表では、接頭辞 *er-* を伴う動詞を具体的な分析対象とし、その形成規則の生産性を調査・分析した結果を報告する。語彙形成(語句結合)規則の生産性を調査・分析するための基礎研究である。

私たちが本シンポジウムで伝えたいことを一言で言うならば、それは、今後のドイツ語研究の展開にとって、今、一度、ドイツ語の使用実態をしっかりと見ることが有意義かつ重要ではないかということである。

1. 大規模コーパスを用いると何が見えるか

時田 伊津子

近年、ドイツ語研究において大規模コーパスの使用が可能になり、従来とは比べようもないほど大量のデータが収集できるようになった。本発表では、大規模コーパスから収集しうる大量のデータを活用することによって、従来にない新たな知見が得られるようになることを、具体例を挙げて述べる。

私たちが大規模コーパス活用の一つの可能性として想定するのが「言語使用」の分析である。言語使用分析では、個々の語彙や言語形式の実際的な使用(頻度、多様性、条件など)を対象とするため、大規模コーパスから収集した大量のデータが不可欠となる。大規模コーパスの活用による言語使用分析の方向性として、目下、

(a) 言語使用の実態を明らかにすること

(b) 言語使用の原理を明らかにすること

などが考えられるが、今回は、後者、言語使用の原理についての分析結果を示す。具体的には、二重目的語構文の語順に関する情報構造的な原理を実証的に示す。例えば、情報は定・不定の順で現れる、不定情報は複数ではなく一つの項が担う、文頭の項と中域語順には関連があるといった仮説を、語順や項の特性などの頻度分析をもとに実証し、背景にある情報構造的な原理を提示する。

このような仮説の実証、原理の提示は、大規模コーパスに基づく大量のデータの収集・頻度分析ができて初めて可能になるものである。

2. 語彙使用頻度調査は今どこまで可能になっているか

山田 善久

語彙の使用頻度は、人がどのような事物に関心を持って発話を行っているかを示すものであり、その調査は、合理的な語彙学習を可能にする。大規模コーパスが活用可能になった今、語彙の使用頻度調査は新たな局面を迎えており、derewo (IDS Mannheim), dewac (Trento 大学), DW (Leipzig 大学) などの大掛かりなドイツ語語彙使用頻度調査が行われている。この報告では、これらの調査を紹介するとともに、現在我々が試行的に行っているいくつかの語彙使用頻度調査の結果を報告する。

「コーパスが異なると調査結果も異なる」という方法論的批判がなされる。この問題に適切に対処するためには、どのコーパスがどのように異なるかを明らかにする必要がある。このような問題意識のもとで、上掲の大規模コーパス頻度調査を比較検討する。特定語彙（親族名詞）に関する「コーパス間の相関性」についても簡単に紹介する。

均衡コーパスではなく、分野別・レベル別コーパスを構築し、調査・分析すべきであるとの主張がある。分野別の一例として、機械用語の語彙使用頻度調査結果、レベル別の一例として、CEFR B1 レベル教材における使用語彙の頻度調査結果を報告する。さらに市販の各種独和および独独辞典の見出し語の頻度調査・評価について報告する。

3. コロケーション頻度調査は今どこまで可能になっているか

今道 晴彦

語彙同様、コロケーションの合理的な学習には使用実態の調査が有益であると考え

られる。このような観点に立ち、本発表では、現在どのようなコロケーション頻度調査が可能になってきているのかを紹介するとともに、我々が試行的に行っているいくつかの調査事例について報告する。

報告の主なポイントは、現行の分析手法の可能性と問題点をまとめ、ドイツ語教育への応用を見据えた具体的分析事例を提示することにある。

コロケーションには連続・非連続の二通りの組み合わせがある。前者の分析には、単語 N-Gram 分析があり、Google から英語、日本語の N-Gram データが公開されている。5 千万語のコーパスで行った我々の試行的調査によると、ドイツ語の場合、語順や活用変化の関係から、大量のデータが必要であるという問題点があげられる。また、後者に対応したものとしては、キーワードの前後に出現する語彙を拾い上げることで連続・非連続の共起パターンを数え上げる分析手法がある。技術的に確立されているため、コロケーションの使用実態の調査に有益であるものの、意味役割に関する頻度処理が困難という問題点があげられる。そのため、サンプル調査の平均から母集団を推定したり、構文タグつきコーパスを利用したりする対策が提案されているが、問題点も少なくない。

こうした問題点も踏まえた上で、語句（品詞）結合の使用頻度と使用領域を含めた具体的調査事例を報告する。

4. Web コーパスを用いて何がさらにできるか

阿部 一哉

現在、大規模コーパスを利用することによって、語彙形成規則の使用実態を問うことが可能になった。このことは言語教育においても有益である。本発表では、接頭辞 er- と既存の語を結合して形成された動詞（以下 er-動詞）を具体的な対象とし行った、形成規則の使用実態についての調査手法および分析結果を示す。

まず、先行研究、辞書記述、新たな調査・分析などから抽出した er-動詞の形成規則を示す。

次に、大規模コーパス dewac を用いた、形成規則の使用頻度についての調査手法および分析結果を示す。ここでは er-動詞の形成規則ごとの出現頻度から、その使用頻度について考察した。なお、dewac は、大量の Web ページを収集し加工したコーパスで、一定量のデータから成るため出現頻度分析に適している。

次に、Google 検索を用いた、形成規則の生産性についての調査手法および分析結果を示す。ここでは、形成規則に従い人工的に形成した er-動詞が、実際に用いら

れているのかどうかを検証した。なお、Google 検索はその検索対象となる範囲が膨大であり、検索ヒット数の算出も概算的なため、出現頻度分析には不適だが、ある形態が WWW 上で実際に使用されているのか否かの調査には適している。以上の分析は、現時点での言語使用を捉えた Web コーパスを使用することにより、はじめて可能になったものである。

口頭発表：ドイツ語教育（10:00～12:15）B 会場（8 号館 8101）

司会：宮谷 尚実，松岡 幸司

1. „Multilingualismus – Plurilingualismus“

Stefan Trummer

Plurilingualismus im europäischen Sinne wurde in den letzten Jahren vielfach diskutiert. Die Verschiedenheit der Definitionen verweist dabei auch direkt auf die Vielseitigkeit des Begriffes. In Japan findet u.a. auch der Aspekt, dass Plurilingualismus muttersprachliches Sprachvermögen nicht mehr zum eigentlichen Maßstab nimmt, immer mehr Beachtung, wie mir scheint, aber vielfach als Erleichterung für die Lernenden missinterpretiert. Das Gegenteil ist der Fall! Die Anforderungen an die Lernenden wachsen, da im Plurilingualismus stets ein Bereich des „Nichtverstehens“ konstruktiv mitgedacht werden muss. Der Vortrag versucht aus hermeneutischer Sicht, die Gebundenheit des Plurilingualismus-Konzeptes an das Konzept wechselnder Identitäten und die Pluralität hermeneutischer Entwürfe aufzuzeigen. Ältere hermeneutische Konzepte, wie die „Einfühlung“, müssen einem „Verstehen als Vollzug“ weichen, eigene „Selbigkeiten“ (Figal) aufgeben und die „Kunst des entfremdenden Blicks“ (Plessner) erlernt werden. Europäischer Plurilingualismus stellt somit Ansprüche an die Persönlichkeitsbildung der Lernenden, wie sie bisher in dieser Konsequenz noch kaum gedacht, geschweige denn praktisch umgesetzt wurden.

In der Folge stellt sich auch die Frage, inwieweit das europäische Plurilingualismus-Konzept für Japan kompatibel sein kann, da hier ja das Konzept wechselnder Identitäten bislang dezidiert nicht zum Bildungsziel erklärt wird. Ein eigenes japanisches Plurilingualismus-Konzept sollte auf jeden Fall mehr sein, als die Reduktion des europäischen Konzeptes um seinen didaktisch anspruchvollsten Teil!

2. Überlegungen zur Integrationsmöglichkeit des projektorientierten Lernens in den japanischen Deutschunterricht

Junko HORIGUCHI

„Projektunterricht ist eine längere, fächerübergreifende Unterrichtseinheit, die durch Selbstorganisation der Lerngruppe gekennzeichnet ist und bei welcher der Arbeits- und Lernprozess ebenso wichtig ist wie das Ergebnis oder Produkt, das am Ende des Projekts steht.“ Dieser Satz steht als Einführung und Definitionsversuch des Projektunterrichts in einem Handout eines Fortbildungsseminars, an dem die Vortragende teilgenommen hat. Diese Definition entspricht wohl der allgemeinen Vorstellung des Projektunterrichts und löst sicherlich bei vielen Lehrenden in Japan eine gewisse Ratlosigkeit gegenüber dieser Methode aus.

Aber es gibt verschiedene Formen der Projektarbeit. R. E. Wicke zum Beispiel unterscheidet zwei Versionen des „Projektorientierten Lernens“: Sogenannte Projekttage oder Projektwochen, die den üblichen Schulunterricht aussetzen und im Fachunterricht integrierte Miniprojekte. J. Bastian/H. Gudjons schreiben: „Projektunterricht soll also weder den Lehrgang noch andere Unterrichtsformen ablösen. Anzustreben ist eine den jeweiligen Zielen, Inhalten und Lernvoraussetzungen angemessene zirkuläre Integration von verschiedenen Unterrichtsformen.“

Im Vortrag sollen Merkmale und Formen des Projektunterrichts kurz skizziert und Integrationsmöglichkeiten dieser Methode in den japanischen Deutschunterricht überlegt werden. Einige Beispiele von projektorientierten Ansätzen, die die Vortragende in ihrer Unterrichtspraxis durchgeführt hat, werden vorgestellt. Anhand dieser Beispiele und aus Sicht einer nichtmuttersprachlichen Lehrenden wird versucht zu analysieren, welche der Projektmerkmale relativ leicht und welche schwerer zu erfüllen sind.

3. 自律的能力の育成をめざしたプロセス重視のドイツ語教員養成・研修モデル

太田 達也

本発表は、日本におけるドイツ語教員養成およびドイツ語教員研修のあり方について、理論的・実践的先行研究を踏まえたうえで再検討し、自律的能力の育成をめざしたプロセス重視の教員養成・研修モデルを提案するものである。

現在の日本におけるドイツ教員養成・研修の現場では、単なる実践的な授業法（例えば「受動態の教え方」など）に終始せず第二言語習得研究や実証的研究の知見を積極的に取り入れた科学的アプローチが以前に増してとられるようになってきた。しかし理論や研究についての情報を与えてそこから実践への応用力をつけさせるというモデルでは、自ら問題を発見し解決するというプロセスが欠如しているため、教員として必要な自律的授業分析能力を十分に身につけさせることが難しいと考えられる。

教員個人の経験やビリーフを大切にしつつ、問題解決能力・自律的能力・アクションリサーチ能力の育成を目指したモデルによる教員研修は、現在世界各国の Goethe-Institut を中心に ESRA-Modell（E=Erfahrung, S=Simulation, R=Reflexion, A=Anwendung）として広く実践されているが、日本ではこうした教員養成・研修の理論やモデルそのものについてほとんど議論されないままに各現場でコースがデザインされてきた。したがって、日本におけるドイツ語教員養成・研修の改善のためには、1）議論のための共通の理論的基盤の形成、2）単なる「理論と実践」から自律的能力の育成をめざしたプロセス重視型へのシフト、3）日本の実情を考慮したモデルの考案、が求められる。

4. 日本人とネイティブによるチームティーチングと Moodle を利用した e-Learning 学習の組み合わせによる初級ドイツ語授業の試み

里村 和秋, Oliver Bayerlein

削減された初級ドイツ語の授業時間数を補い、学習レベルを維持するために、最近では対面授業に e-Learning を結びつけたいわゆる Blended learning が導入されつつある。この発表では、教育効果のさらなる向上と運用コストの削減のために、新たな Blended learning の授業モデルを提示する。その際、従来連携のなかった CALL システムと e-Learning システムの間にインタラクティブな関係を構築するための適切な方法は何か、また日本人教員中心に行われている初級者向けの授業においてどのようにアクチュアルな内容を提供すべきか、そして高額な導入コストがネックとなる新システムやコンテンツを活用するために、どのような方法が考えられるか、などが論点となる。

この授業モデルでは、具体的には従来の CALL 教室での対面授業に、ビデオ通話ソフト Skype を利用したネイティブとのチームティーチングと、さらに授業時間外で

の e-Learning ソフト Moodle の学習を組み合わせている。この新しい Blended learning モデルは、①e-Learning ソフトの利便性や授業運営の効率化、②コンテンツやチームティーチングの学習効果、③モチベーションと学力の向上、④フィードバックシステム（特にフォーラム機能）の有効性、などの観点から評価が行われ、効果が実証された。

口頭発表：語学 2（10:00～12:15）E 会場（8 号館 8304）

司会：荻野 藏平，嶋崎 啓

1. ゴート語 *tēkan* „berühren“ とトカラ語 B *tek-*, *täk-* „berühren“ の関連性について — トカラ語の側からの再検証と新たな見解 —

安永 昌史

ゴート語 *tēkan* のインドゲルマン的由来については、古くから多くの議論がなされているが、未だに決定的な結論が得られていない。例えば Lehmann のゴート語語源辞書(1986)では、語源は難しいとして、**dēg-*, **tag-*, **teg-*等の考えうるインドゲルマンの語根について懐疑的な見解を示している。

この問題に関する最も新しい提案の一つに、Mottausch (1993)のものが挙げられよう。この提案は、現在の印欧語学における最も重要な参考物の一つである *Lexikon der Indogermanischen Verben* (2001)にも採用されている。彼は、*tēkan* を語根 **teh*₂*g-*

(または **teh*₂*g̃-*) に還元できるとし、ギリシャ語 *τεταγών* „fassend“、ラテン語 *tangō*,

tangere “berühren”あるいはトカラ語 B *tek-*, *täk-* „berühren“も同じ語根から派生していると考えられる。

多くの語形を単一の語根に収斂させる彼の提案は一見魅力的であるが、幾つかの点において疑問がある。例えば、例外的とも言える変化 (**teth*₂*g-* > **tetg-* > **tedg-* → **dedg-*の影響で、**tēg-* → **dēg-* > *tēkan* となったとする)には類例が乏しい。またトカラ語の側から見れば、何故に *athematisch* な現在語幹 **tēg-*が、*thematisch* に改変されたかの理由が不明である。本発表はこのような点を詳細に検討し、各語形に相応しい合理的な歴史的背景を考える。

2. ルクセンブルク語の接続法—間接話法と要求話法を中心に— 田村 建一

ルクセンブルク語（以下L語）は、ドイツ語モーゼルフランケン方言を基盤として19世紀前半以来の拡充（Ausbau）を経て成立した新しい言語である。文章語としての伝統が浅いため、L語には標準ドイツ語では許容されないが方言や日常語には見られるような特徴が存在する一方で、過去数十年間の急激な拡充のなかで標準ドイツ語からの影響も強まっている。

本発表は、主として児童文学作品における間接話法と要求話法の用法に基づきドイツ語およびフランス語との対照をとおして現代L語の接続法の特徴を探るものである。『星の王子さま』の原文と翻訳の対照から、以下のことがわかった。(1) 主節が「言う」「訊ねる」型の従属節は、フランス語原文では直説法が用いられるのに対して、ドイツ語とL語では接続法が用いられる。(2) 主節が「知っている」「わかる」型の従属節は、フランス語とドイツ語では直説法が用いられるのに対して、L語では接続法が用いられる。(3) ドイツ語とL語で直説法が用いられ、フランス語で接続法が用いられるのは、従属節に接続法をとることが義務付けられる *exiger* 「要求する」や *être content* 「うれしい」などの語句が主節の述語である場合がほとんどである。

こうした特徴が他のテキストにおいても指摘できるのかどうか検討するとともに、特にL語とドイツ語の用法上の違いをどう説明すべきか考察を加えたい。

3. 話法助動詞 *müssen* の意味の変遷と認識的意味の成立 宮下 博幸

話法助動詞 *müssen* の通時的意味変化の問題には二つの焦点がある。一つは、本来の「許されている」のような可能性をあらわす意味から、「せねばならない」という義務的意味が、どのように生まれてきたかという点であり、もう一つは、「せねばならない」という義務的意味から「ちがいない」という認識的意味がどのように生じてきたかという点である。後者の意味変化は世界の系統を異にする言語にも見られ、近年文法化研究で注目されている。本発表では、とりわけ後者の問題、すなわち認識的意味がどのようにして生じてきたかを、通時的データに基づき考察したい。

まずこれまでの論点を整理する。*müssen* の可能性から義務性への意味変化については、従来の3つの立場を挙げ、問題点等を指摘する。さらに認識的意味への変化

についても、これまでの立場を整理し、課題を明らかにする。これらの問題を考える際には、中高ドイツ語期の用例の分析が重要となる。というのもこの時期に義務の意味が定着し、また認識的意味への発達が起こったとされるためである。本発表では、引き続き中高ドイツ語の電子コーパスを利用し、実例に基づいて上の問題を考察する。それにより認識的意味への変化では、義務の意味が一般化して「必然」を表すようになり、出来事を必然的だと判断するのに用いられることによって、次第に認識的意味へと移行していったと主張したい。また義務的意味への変化についても、今回扱うデータで可能な範囲でこれまでの立場の検証を試みたい。

4. 19世紀における〈新聞の言語〉批判をめぐる„Sprachbewusstsein“

細川 裕史

19世紀は新聞がマスメディアとなり、新聞を通じて「書きことばの大衆化」が起きた時代とされる。その際、„Zeitungsdeutsch“を蔑称として造語した Arthur Schopenhauer などの教養人にとどまらず、Gustav Freytag ら新聞の書き手であるジャーナリスト自身までもが〈新聞の言語〉批判を行った。はたして〈新聞の言語〉は、何を根拠にして批判されたのであろうか？〈新聞の言語〉は、Hans Eggers (1973) が指摘するように、文章語の統一体として存在するわけではない。むしろ、Peter von Polenz (1999)が当時の〈教養市民の言語〉について述べたのと同様に、〈新聞の言語〉とは特定の「言語意識」を指す概念だと考えるべきである。(ここでいう「言語意識」は、Joachim Scharloth (2005) に従い、「メタ言語的な知識の集合体」と定義することができる。) 本発表では、Stephan Elspaß (2005) らの標榜する「社会語用論的」ドイツ語史研究の立場に立ち、教養層の言語のみではなく、非教養層の言語の歴史にも注目しながら、当時の「言語意識」を分析する。その分析を通じて、ジャーナリストは新たに読者となった非教養層が日常どのような言語を使用していたかを考慮した上で批判していたのに対して、その他の言語批評家は〈教養市民の言語〉との比較からのみ〈新聞の言語〉を批判していた、という仮説を検証する。

口頭発表：文学 2（10:00～12:50）F 会場（8 号館 8202）

司会：村山 功光，荒又 雄介

1. 「壁の白とページの白 —ウィーン分離派の建築と出版物—」 浅井 麻帆

ウィーン分離派の理念と、その理念の結実であるウィーン分離派館という建築物、並びにウィーン分離派が刊行していた雑誌『ヴェル・サクルム』について取り上げる。ウィーン分離派は、美術・建築・文学という三側面に等しく関わりを持つ。従来の研究は、それぞれの枠内で行われてきた。私は、いわゆる「総合芸術作品（Gesamtkunstwerk）」を目指していたウィーン分離派に、総合的に迫ってみたい。ウィーン分離派は 1897 年に結成された。翌年彼らは、自分たちの作品及びマニフェストを掲載するため、雑誌『ヴェル・サクルム』を創刊した。さらに 1898 年 11 月には、彼らの作品展示のためのウィーン分離派館が完成する。分離派の理念は、結成当初より「簡素」の美であった。ところが、彼らの言葉とは裏腹に、『ヴェル・サクルム』第一年次(1898 年)の装丁は装飾に満ちている。第二年次(1899 年)になってようやく、装丁は彼らの言葉通りに簡素になり、誇張された余白が現れる。同時期に完成した分離派館は、白い壁を持つ非装飾的な建物であり、その壁こそは彼らにとって「簡素」を体現するものであった。何故、彼らの理念が、1898 年の『ヴェル・サクルム』の装丁には反映されなかったのか。『ヴェル・サクルム』及びウィーン分離派館に現れる、1899 年の彼らの「白」はいかなる「簡素」としての「白」なのか、書物の装丁・建築・テキストを総合的に分析することにより考えてみたい。

2. 詩人の想像力と歴史哲学 デイルタイにおける力の概念 森田 團

歴史認識の対象が過去の出来事であるかぎり、それは二度と現在に回帰するようなものではない。したがって、その認識は本質的に想起の形式をとることができよう。想起は反復できないものの現前化し、再生することができるからである。デイルタイ自身、歴史は想起であると述べているが、そのとき念頭に置かれているのは以上のような論理にはほかならない。想起が行う再生の秘密は、彼によれば、その根柢において働いている想像力にある。このような観点から見れば、「詩人の想像力——詩学への寄与」（1887）は、歴史認識が孕み持つ秘密への注釈

とみなしうることになろう。発表では、諸々のイメージを生き生きとした統一体に纏め上げる能力としての想像力が、内（たとえば内的知覚）と外（たとえば外的知覚）の統一に関わるという「詩人の想像力」におけるディルタイの議論を追い、この想像力の作用を、とりわけ『精神科学における歴史的世界の構成』（全集版 1927）における諸論文において展開される歴史認識の理論うちにも読み取れることを示す。歴史認識は一連の経過や出来事の連鎖を包括する歴史像の獲得を目指す、そのためには内（記憶）と外（歴史的事実）を統一する想像力の働きがやはり必要なのである。さらに、この統一の働きが根源的には力の「充溢 Fülle」に発すること、またそれこそが生にほかならないことを明らかにしたうえで、最終的には力としての生と想像力との根源的連繫を浮かび上がらせることを試みたい。

3. ドイツ啓蒙における「人間性」と「美的なもの」—レッシングからアドルノへの道筋—

藤井 俊之

「人間性 (Menschheit, Humanität)」という視点からドイツ啓蒙を考察し、その際、20世紀フランクフルト学派の哲学者・批評家 T. W. Adorno (1903~1969) の『Ästhetische Theorie』(1970)や、18世紀のドイツ啓蒙の代表者である G. E. Lessing (1729~1781) の『Hamburgische Dramaturgie』(1767)などを主題的に取り扱う。Adorno の『Ästhetische Theorie』は Martin Jay などによって、これまで芸術作品の自律性を擁護するものとして位置づけられてきたといえるが、しかし、そのような見解とは別に、Paul de Man のように「ästhetisch」という言葉に含まれる多義的な意味の読解こそ不可欠とする見解もみられる。この相違の源泉を、Adorno における「ästhetisch」と「kollektiv」の関係から考察することで、そこに啓蒙主義の一側面、すなわち、E. Cassirer や P. Hazard などによって指摘される、Lessing における「歴史」と「真理」との対立の問題を読み取り、これによって Lessing から Adorno へといたるドイツ啓蒙の一側面を考えていく。

Adorno において「ästhetisch」という概念は「kollektiv」という言葉によって「sensus communis (共通感覚)」に通じており、この言葉は啓蒙の最終的審級としての「人間性」という理想とかかわっている。Lessing が、その演劇論において個々の作品を道徳的な効果において評価したことと、「ästhetisch」なものの自律を考えていたこととを、Adorno の芸術論と並べてみることで、ドイツ啓蒙における「人間性」

と「美的なもの」との接触と離反が検討される。

4. F. キットラーと情報通信技術 —人間×^{マン}機械^{マシン}進化論の観点から— 豊倉 尚

F. キットラー(Friedrich Kittler)は、聴覚メディア(グラモフォン)・視覚メディア(フィルム)・文書メディア(タイプライター)の登場が活字印刷術の寡占構造を解体し、それを新たな下位区分として包摂していく様を詳細に分析した。この過程を、情報通信技術における「リアルなもの(聴覚)」「イマジネールなもの(視覚)」「サンボリックなもの(書字)」の自己分節化と言い換えることが出来る。ところでグラスファイバー・ケーブルによる全一的ネットワーク化を指向する未来への眼差しは、これらの分節化をも巨大な単一情報チャンネルの中に収束させてゆくかに見える。機械と人間(身体)の発展的連続性を唱えるブルース・マズリッシュ(Bruce Mazlish)の人間×^{マン}機械^{マシン}進化論を引き合いに出せば、我々は自らの身体のサイボーグ化の只中にあると言っても良いであろう。それは身体の「不死」へと向かう道程でもある。しかし、この過程を机上のシミュレーションのみによって捉えるべきではない。その点で前世紀における、いわば残余としての極限的な半—身体/半—機械のありようは、身体の「死」を考える上で示唆に富んでいる。第二次世界大戦中のガン・カメラ(航空写真銃)に収められた映像には、半ば機械となった身体、その生理学的偶然もしくは統計学的混乱としてのリアルなものが発する「叫び」が、鏡像の帯びる幻想性=イマジネールなものを剥ぎ取られた形で生々しく現存している。半—機械となった身体が消滅していく瞬間における「知覚の図式化」は可能か、可能であるとすればそれはどのようにしてか、この発表ではその辺りのことを考えてみたい。

5. »Zur Kritik der Gewalt« als Kriegserinnerung

Naoki Mukai

In Spätsommer 1919 entwarf Walter Benjamin einen Plan zur Arbeit über die Politik. Daraus erschien nur eine Abhandlung unter dem Titel »Zur Kritik der Gewalt«. Während seine Kritik zur „Gewalt als Mittel“ in weitem Umfang anerkannt ist, bleibt ihr Hintergrund, das „Kriterium der Gerechtigkeit“ im Schatten, weil alle anderen Teile dieses Plans verloren gingen. Also müssen wir dieses Kriterium näher erforschen.

In diesem Zusammenhang möchte ich eine Notiz „Über Jona und den Begriff der

Gerechtigkeit“ von Gershom Scholem betrachten, deren erste Niederschrift m. E. aus einem Gespräch mit Benjamin herauskam. Einige religionsphilosophische Konzepte in ihr, z. B. „der zur Handlung gewordene Aufschub der Vollstreckung“, bringen den jüdischen Hintergrund jenes Plans ans Licht. Er ist eine Schicht, die hinter der messianischen Idee häufig verkannt wurde. Die jüdische Geschichtsphilosophie fasst die Präsenz des Gottes nicht nur in der zukünftigen messianischen Zeit, sondern auch in der hoffnungslosen Vergangenheit, wo Gott abwesend war, auf.

In seiner »Kritik« bezieht Benjamin den Begriff der Gerechtigkeit auf den religiösen Bereich. Aber das bedeutet keinen Zurückfall in die religiöse Dogmatik, geschweige in die messianische. Der Begriff von „Gott“ betrifft ein Kriterium für nüchterne Erkenntnis, das von den historischen Data unabhängig sein soll. Mit dem rätselhaften Wort der „göttlichen Gewalt“ spricht er nicht von der Hoffnung auf die mögliche Revolution in der Nachkriegszeit, sondern von der Erinnerung an eine Katastrophe, den Ersten Weltkrieg.

口頭発表：文学3（10:00～12:15）G会場（7号館7102）

司会：美留町 義雄，井口 三奈子

1. ムージルのアフォーリズム集構想とロマンとの関係

桂 元嗣

ムージルは1930年代、時局の分析にアフォーリズムを重視しはじめる。それとともに彼は難航する『特性のない男』の「庭の章」の執筆と平行して「下書き帳」と呼ばれるアフォーリズム集の出版を検討するが、果たせずに終わる。にもかかわらずムージルが「下書き帳とロマンは手に手を携えて進む」と記すとき、彼の言葉は何を意味するのか。本発表では、第二次世界大戦へとなだれ込む状況下にアフォーリズムという形式が要請された経緯と、『特性のない男』の内実との連関を探る。

すでに指摘されているように、1930年代のムージルのアフォーリズムからは主にドイツやオーストリアの文化政策や、その政策に盲目的に従う「平均的人間」への批判的分析が読み取れる。ムージルは第一次世界大戦後の文化政策により台頭したヴィルトガンスら折衷主義者を「時代の症候」とみなし、彼らの主張する「オーストリア的理念」をロマンという美的空間において抽象し、第一巻の「平行運動」で描いた。アフォーリズムという形式は、ファイファーが主張するようにロマンの叙述形式に取って代わるものではなく、ムージルにとっては激変する現実を分析しつつロマンの連関へ変換するための「下書き帳」なのである。一見現実世界と切り離されたように見える「庭の章」においても、ムージルはアフォーリズム集構想を通じて問題点が明確となった「平均的人間」に対する視点を新たに加えようとしていることがわかる。

2. 偶発性の詩学 バッハマンの『偶発・発作のための場所』について

徳永 恭子

1964年に行われたバッハマンのビューヒナー賞講演『偶発・発作のための場所』Ein Ort für Zufälleを取り扱う。このテキストは、シュールレアリスティックな文体で書かれ、一見支離滅裂で捉えどころがない故に、分析・総合的に研究されることはなかった。本発表では、このテキストを作家の詩学的表明として読み解いていく。

タイトルの「偶発・発作のための場所」とはベルリンを指しており、東西冷戦下にある大都市が眩暈を惹き起こすかのような文体で描き出される。その際旋回するのは文章のみではなく、都市の空間自体が実際に回転する様が描かれる。「偶発・発作のための場所」とは、ずらされ、狂い続ける *ver-rückt* な場なのである。しかしながら、なぜ冷戦下の都市を描くに際し、このような歪んだ空間描写が必要なのだろうか。場の歪みと政治・歴史との関係を考察していく。

また本発表では、タイトルにある *Zufälle* という語に着目する。この語はビューヒナーの『レンツ』における狂気の「発作」を暗示すると共に、「首尾一貫したもの」*das Konsequente* に対置される「偶発」という意味が二重に付されている。啓蒙的理性が首尾一貫性の法則にのっとり、自らを省みることなく、野蛮へと反転したアウシュビッツ以後、バッハマンの詩作は、この「発作・偶発」的なもので、首尾一貫性のメカニズムに異議申し立てを行う。*Zufälle* の概念によって、アウシュビッツ以後の文学の中に、バッハマンの詩作を新たに位置づけなおすことを課題とする。

3. 文学はごみである ―ベルにおけるフモールの概念をめぐる―

木本 伸

現在、初めての歴史批判版全集の刊行を受けてベル文学の見直しが始められている。その中には「もはやベルに現代的意義はない」と主張する批判的意見もある。それは「政治的文学者」(シュピーゲル誌)という称号を与えられた作家にとって、社会状況の変化とともに一度は受けねばならない試練ともいえるだろう。たしかにベルはその時々社会状況から遊離することなく思索した。しかし、その作品の核心には彼が見据えていた近代の問題があった。それは有用性を追求する社会においてごみのように見捨てられていく人間存在の問題である。彼の主人公たちは社会の片隅でまるでごみのように生きていく。たしかに特定の目的を追求する社会において有用性を認められないものは、ごみである。だが、そもそも存在は有用性へと還元されうるものだろうか。このような有用性へと還元できない存在の深みを社会のごみは視覚的に明示している。ここにベルの文学的テーマがある。彼は「社会からごみのように扱われているものだけを文学はテーマとすることができる」と述べ、ごみに高貴さを見い出すフモールの視線に文学の意義を認める。それは有用性の視線にさらされた存在が本来の姿で受容される場であり、そこに

人間は自己の存在根拠を見い出すのである。その意味で「文学なしには国家は存在せず、社会は死んだも同然である」と、ベルは主張する。彼の作品の社会批判性については、これまで十分に論じられてきた。しかし、ごみという否定的契機から反転して近代が覆い隠してきた人間の存在根拠を示すというベル文学の積極性は、ほとんど語られていない。それは現代における文学の意義を考えるうえでも重要な視点となるのではないだろうか。

4. Uwe Johnson „Jahrestage“ における両想起構造の結節点 江面 快晴

Uwe Johnson のライフワーク *Jahrestage* の主人公 Gesine の回想において、想起の対象とその語りの場が特に密接な関係を持つことは Offe(2006)、Helbig(2001)らによって指摘されている。

その半生を通じて国際政治的なマクロ要因が Gesine の個人的ミクロ世界に明確に、無慈悲に侵食してきたことは記憶の伝達を通じて改めて意識に上り、Marie という受け手を待って再構成されていく。このとき語りを通じて起こる想起の連鎖が、さらに語りの時点での現在に繋がっていくという二重の連鎖が *Jahrestage* の語りの進行全体を導く動因となっている。この語りによって二重になった想起の連鎖構造はすでに早くから「繰り返された過去としての現在」(Hye,1978)として言及されており、近年再び「オルタナティブの再失敗」(Gerlach,2006)と表現されている。

これらの連鎖構造から *Jahrestage* における想起構造を分析する立場は、即物的でミクロな、場を中心とした想起構造の分析とは対立する点が少なくない。しかし本来これらは *Jahrestage* 全体の構造から見て必ずしも対立するもの、またはモザイク的に双方が組み合わせられたものではなく、両構造は歴史が個に重なり合う語りの場において交じり合うものである。本発表はこのような過去の想起とその伝達が、その伝達の時点における現在をも取り込んでいく語りの構造に着目し、*Jahrestage* における想起構造の両価性とその結節点の位置を明確化していくことをねらいとしている。

ポスター発表 (10:00~13:00) H会場 (10号館)

(ポスター発表は同時進行です)

(X207 教室)

- 音声コミュニケーション中心の少人数授業と学習者のドイツ語運用能力
星井 牧子、生駒 美喜、石塚 泉美、朝倉 久絵 (研究協力者)

本報告では調査研究プロジェクトの成果の一部として、「音声コミュニケーション中心」「少人数での授業」「ドイツ語を母語とするチューターをつける」という条件のもとで日本語を母語とするドイツ語学習者のドイツ語運用能力にどのような変化がおきるのかを、1) 統語、2) 語彙、3) 音声、4) コミュニケーション行動から考察した結果を紹介する。

授業におけるドイツ語学習については、フランス語や英語を母語とする学習者の研究があるが、統語構造を中心とした分析や作文データを用いた研究が多く、コミュニケーション場面での学習者の言語行動の多角的な調査は少ない。学習環境と関連した言語行動の実証的研究、特に日本語を母語とするドイツ語学習者の運用能力や習得過程の研究はほとんどないといってもよい。

報告者たちによるこれまでの調査では、音声コミュニケーション中心の少人数授業により、学習者のドイツ語運用能力に以下の変化が観察されている。

- ・発話内ポーズの短縮、1分毎の音節数増加、先行発話への反応時間の短縮
- ・コミュニケーション・ストラテジーのカテゴリーと使用の増加。
- ・複雑な文構造の出現、語彙の増加。
- ・事前の学習経験でドイツ語母語話者との接触が少ないほど授業前後の変化が大きい。

また、学習者のドイツ語発話を転記する際の問題点は、学習者のドイツ語の特徴を示していると考えられる。

本研究の分析結果を提示し、日本語を母語とするドイツ語学習者の学習環境と習得過程の関係、および調査方法についての議論の契機としたい。

(X208 教室)

● ドイツにおける青少年保護政策とメディアリテラシ教育の現状

濱野 英巳

ドイツ語教育の現場において、コンピュータやインターネットを初めとする新メディアの導入は今や不可欠のものとなっているが、その一方で、これらを単なる語学教材としてではなく、メディアリテラシや構成主義といった枠組みで捉え、体系的な活用をしようという試みは未だ多くはなされていないように思われる。日本におけるメディアリテラシ教育と同じく、ドイツにおけるメディアリテラシ教育にもまた、英米やカナダといった英語圏からの影響が多く見られるが、EU内で最も厳しいと言われる青少年保護法の施行以来、そのあり方にも変化が起きているようである。メディアリテラシ教育は、その国の歴史的背景、社会事情と密接に結びついている。その変化の是非は別にしても、ドイツ国内においてメディアというものがどのように捉えられ、また教育に取り入れられているのかを知ることは、我々ドイツ語教師にとっても、決して無駄なことではないだろう。発表者は、2007年12月2日から15日にかけて文部科学省、ドイツ連邦家族・高齢者・女性・青少年省の共催による「日独青少年指導者セミナー」に参加し、ドイツにおける青少年保護政策の専門家、並びに現場の教育者達とセッションを行ってきたが、本発表では、ドイツにおける青少年保護政策、メディアリテラシ教育の概観、及びその事例について述べるだけでなく、セッションの中で感じられた問題点についても広く議論ができればと考えている。

(X209 教室)

● 唱歌とドイツ文化受容

高木 良平

「唱歌」は、幕末・明治期の西洋音楽受容において軍楽隊、賛美歌と並ぶ三本柱の一つとして重要な役割を担ってきた。教員も教科書も全くないところから短時間で成果を上げていった過程そのものも注目に値するが、のみならず外国曲の旋律に原詩と関係のない内容の作詞を施し、「唱歌」という一つの教科で音楽と道徳を(遊戯歌では体育も)教えようとした伊澤修二らの慧眼には驚嘆させられる。しかし、国民の徳性の涵養を目的とした唱歌教育は、軍歌とともに忠君愛国思想の形成に寄与した。また、最近の研究では、「唱歌」の「近代化の装置」としての

機能や植民地支配における役割についても指摘されている。

このように、音楽学、教育学、国語学そして比較文学等様々な領域からの研究がなされてきたが、これらを踏まえながらも本発表は文化受容という観点から「唱歌」が果たした役割を明らかにすることを目的とする。

「和洋折衷」の形で「唱歌」に採り入れられたドイツ曲の歌詞の変遷を追う作業は、同時に1881年の「蝶々」から続く替え歌の歴史の検証であった。近藤朔風による「野薔薇」と「ローレライ」が初めて教科書に載ったのは、1909年に刊行された『女声唱歌』においてで、学校教育の場でドイツ文学作品が歌われるという画期的瞬間の到来であった。音楽と文学と外国語の素養のあった近藤朔風は、「訳詩」というジャンルを確立しドイツ文学の大衆受容に貢献した。